

置き去りにめげず
カザフスタンで
生き抜いた同胞たち

小川 峠一

置き去りにめげず カザフスタンで生き抜いた 同胞たち

小川 峠一

まえがき

一、十四歳で捕まり、五十六年ぶりに永住の三浦正雄さん

二、子供はドイツに別れ住む運命の伊藤實さん

三、いまだ帰れず 日本人墓地守る 阿彦哲郎さん

四、望郷四十七年、死亡宣告の小関吉雄さん

五、父の執念、四十一年ぶりに妻子を捜し当てた松元家のこと

六、再会を喜ぶ抑留者三人の雑談会

三浦さん・阿彦さん・伊藤さん

あとがき

解説

まえがき

日本再北端の稚内市宗谷岬からわずか四十三キロの近さの樺太（現サハリン）の南半分には、約三十八万人の日本人と、大日本帝国臣民とされて徵用などで働く朝鮮半島出身者約三万五千人が住んでいた。一九四五年（昭和二十年）八月十五日を終戦の日というけれども、その後も樺太、千島では戦闘が続き、死傷者が相次いだ。生き残った人たちも敗戦国民の身で差別を受け、生活は困難を極めた。さらに樺太駐屯の兵隊、民間人がソ連軍によつて数多くシベリアに連行され、酷寒と食糧不足のもとで重労働を強いられている。祖国に帰る望みも断たれて死亡する者が続出したが、その正確な数はいまだに明らかではない。

五年前に拙著「樺太・シベリアに生きる〔戦後60年の証言〕」（社会評論社）を出したとき、吉武輝子先生は「置き去り——サハリン残留女性たちの六十年」（海竜社）という超大作を出版された。渾身のドキュメントである。そうだ、男たちにも非情な置き去りがあつたことを伝えておこうとその一端を書き起こしたのが本著である。

敗戦後、満洲や樺太から六十万人もの日本軍人がシベリアに抑留され強制労働に従事させられたことは知られた事実としても、その実態としては、シベリアを経てさらにはるかな遠隔地の中央アジアのカザフスタンに、五万数千人の日本兵のほか員数不明の民間人が樺太、満洲などから同地に連れ去られたことを知る人は少ない。

ソ連抑留捕虜は、戦後十一年を経た一九五六年十二月二十六日、興安丸による舞鶴帰港をもつて引揚げが終了したとされている。しかし民間人は全く放置されたままだったのである。

私たち「日本サハリン同胞交流協会」は、サハリンのみならず、シベリア、極東地方、カザフスタン、ウクライナなど旧ソ連各地に置き去りにされたままだった民間人同胞の一時帰国、永住帰国の支援を続けて、とうとう満二十年になつた。

二〇一〇年一月十四日、わが協会は「シベリア抑留者への補償に関する質問と要望」を民主党幹事長、同問題促進議員連盟の各氏に提出し、民間抑留同胞への補償・援助を訴えた。六月十六日に至り、国会閉会直前になつて「戦後強制抑留者特別措置法」が可決、成立したことは一応前进といえよう。

しかし法の内容は民間人犠牲者への考慮はなく、法案作成に努力した国會議員にしても民間人についての認識はほとんどなかつた。

死の恐怖にさらされた経験は同じでも、元兵士たちは少なくとも集団で労働し、生き残つた人たちには復員でき、軍人恩給も受給できたのである。

他方民間人抑留者はシベリア奥地に一人、カザフの鉱山や農場に一人ずつと、言葉も通じない孤立感、焦躁感をもつて過ごし、多くは死に絶えた。命を永らえた人も、私たちの運動で日本の土を踏んだのは戦後五十数年も経つてからである。

国による調査もなく、一方的に死亡宣告されたこの同胞たち。そしてまだ生きていても祖国に帰ることができない同胞も存在するのに、これに対する補償も配慮もなく、さらに日本軍人とし

て抑留された韓国・朝鮮人については無視という差別はあまりにもむごい。

国会で飛び交う言葉——「説明責任」「納得できる説明」というのは、議員個人の金銭の問題だけに使われているが、こういう人々の労苦に国がどう責任を果たしてきたのか、その姿勢に対してこそ向けられるべきではないかと思う。

今回の法律は「現在生きて日本に住み日本国籍を有する者」への給付金と限定している。ソ連に連行された六十万人のうち対象者は約七万人、平均年齢八十八歳といわれる。まさに「死ぬのを待つ」結果となつた。

付け足しに「強制抑留の実態調査の基本的方針」を策定するとあるが、法案提出者も今さら実態調査ができるはずもないことは百も承知のことであろう。

我々は政府に対し重ね重ね現地調査を要請し、資料も出してきたが、一向に顧慮されなかつた。わが事務所の黒板には、長い年月「来島已一」という名が書かれたままになつてゐる。サハリンから連れ去られシベリアで行方不明の、この一人の行く末、死亡場所だけでも、せめて調べてほしいという老家族の訴えにも反応はない。

ともあれ、戦後六十五年を迎えるこの時期に、いささかなりとも同胞の生きた実態を書き残しておこう。強制労働の状態については数多くの著述にあるのでそれらに譲ろう。ここでは、いわゆる「刑期」が終わつてもさらに働く地域を指定して帰国を許さないソ連、行方不明者を決して捜さうとしない日本国の、残酷と虚偽のはざまで耐え抜いた人間がいたことを証言し、読む人たちに、そこからいささかも生きる勇気が与えられればと思うのみである。

十四歳で捕まり、五十六年ぶりに永住の三浦正雄さん

サハリン（樺太）から日本に逃れようとして捕まつたり、敗戦後に現地に残された親族を捜すために舟で渡り、不幸にも逮捕された例は数多いが、三浦正雄さんも密航の罪でソ連に逮捕され、十四歳から半世紀以上にわたつて人知れぬ苦労の人生を歩むことになる。

三浦正雄さんは一九三三年（昭和七年）八月に樺太南端、亜庭湾に面する能登呂村大吠（おおぼえ）で生まれたが、母は正雄さんが五歳のときに亡くなっている。炭焼業だった父は太平洋戦争が始まつてから再婚し、その新しい母に連れ子がいたこともあって、父母と正雄さんの兄たちとの関係が良くなく、別居の生活になつた。

正雄さんは、すでに成人していた次兄の義雄さん、その下の雪雄さん、姉のタケ子さんによつて育てられた。一九三九年に徴兵された長兄は後に沖縄戦で戦死している。

そのうちタケ子さんが豊原（とよはら）市に嫁いで、敗戦直前の一九四五年七月には義雄さん、雪雄さんが徴兵になり、一人になつた正雄さんは父の家に行くことになつたものの、やはり義母との折合いが悪く、父の友人・窪田重雄氏がかわいそうに思つて自分の家に引き取つてくれた。

正雄さんは、樺太時代の思い出としては、能登呂（のところ）の小学校に毎日二キロの道を歩いて通学、冬には雪道をスキーをはいて通つたことだと言い、同級生には佐藤ユキオ君、大森タカ

才君がいたことを覚えている。

一九四五八月九日、ソ連軍は戦車部隊を先頭に、北緯五〇度線の国境を突破して侵攻してきた。ソ連軍の南下を恐れた窪田氏一家は北海道に渡る決心をし、戦後の混乱で父や姉との連絡が取れなくなつて、十三歳になつたばかりの正雄さんも、窪田氏一家と迷れるしかなかつた。そのとき乗つたモーターボートの脇腹に「カワサキ」という文字があつたのを今も記憶している。

北海道の大岬（今は稚内市）で窪田氏の昆布漁を手伝うことになつたが、窪田氏はたいへん優しく、奥さんの久子さんも息子の英吉君と分け隔てなく愛情を注いでくれて、何不自由ない生活を送ることができた。振り返つて彼の一生の中で、実に不安のない懐かしい時代だったという。

けれども、じきに来るだらうと思つていた父も姉も、冬を越しても、春になつても帰つてくる気配がない。兄が兵隊に行つてしまい、自分こそが、父や育てくれた姉を助けに行かなければならぬという責任感が生じてきたのであつたらしい。そのことを窪田氏に言うと、絶対に反対だつた。「もし樺太に行つたら直ちにソ連軍につかまり、一度と日本に戻ることはできない」と。

今になつて振り返ると、少年の血氣だったかもしれない。それでも家族のことが心配だつた正雄さんは、近所の、樺太から逃げてきた女性教師が樺太の母親を捜しに行くという噂を聞き、彼女に会つて同行を嘆願した。同情して承諾してくれたので、窪田氏が漁に出て不在のときに久子さんに頼み込み、その反対を押し切つて樺太行きを決行したのであつた。

一九四六年七月末、正雄さんは七人ぐらいの大人と一緒に、エンジンもない小さな帆舟で夜中に出航した。陽が出る前に樺太にたどり着こうとしたが、舟の速度は極めて遅く、空が明け始めたとき一隻の巡視艇が近付いてきた。ソ連の国境警備隊で、直ちに全員が逮捕された。

五ヵ月間も拘置され、弁護士もいない形式的な裁判によつて、ソビエト刑法84条国境侵犯罪で一年六ヶ月の懲役刑となつた。他の大人たちは三年の刑だつたという。そのときに、聞きつけた父が刑務所を捜して来て、子供を助けようと嘆願したということは、後々になつて知つたことである。

その後樺太から大陸に連行されるわけだが、刑を受けた民間人たちにとつては、「一年六ヶ月も三年も終身刑と同じようなもの」であることは知る由もなかつた。

正雄さんは、家畜運搬船で真岡（まおか、現在ホルムスク）港から真冬のウラジオストクに運ばれ、その後鉄道でシベリアのマリンスキーザ收容所に移された。少年労働者として綿から糸を紡いだり、ビートの耕作に従事したが、食事はきわめて粗末で、パンもろくに与えられず、調理もしない生のじゃが芋が出されることもしばしばであった。多くの大人たちが貧しい食事と苛酷な労働のために倒れていく中、若い正雄さんは辛うじて耐え抜くことができたのである。

中には日本人夫婦の虜囚もいて、夫が別の収容所に強制的に移され、妻は食事ものどを通らなくなり死んだ。夫婦が引き裂かれたときの叫び声が今も耳に残つているという。



一九四八年初夏、刑期が終わりに近づいた時、正雄さんは日本に帰りたいと申し出たが、収容所長は「出所後三年間はソ連で働くことになつており、それを終えなければ日本に帰すことはできない」と申し渡した。出所の日に、食糧の干し魚などと一緒に、一枚の紙片を渡されたのである。

正雄さんの話、「何が書いてあるのか読めないので、言われるままに停車場（駅）に行き鉄道員に見せると、ある列車に乗せられた。着いたのはノボシビルスクという大きな駅でした。私は再び紙片を女性の駅員に見せたところ、彼女は高圧的に、今まさに出ようとしている貨車に乗れと言う。その貨車に一週間以上揺られて、ある晩に着いたのがカザフスタンのアルマアタ（現在はアルマトイ）という駅。終点らしく皆降りてしまつたが、私が残つていると駅員が来て、何をしているかと言つているようなので、また紙片を見せると、そこで待てと手で制するのです。言われた通りに貨車の中で待つていると、一台の車がやつてきた。ソ連の軍人と、日本の軍服を着た日本将校だったので、お互に驚いたのでした。彼は収容所の紙片をしげしげと眺めて、私は今ソ連軍の捕虜でどうすることもできないが、二、三年後に日本に帰国できると言われている。そのとき君も連れて帰つてあげるからまじめに働きなさいと言い、トマトやナンと呼ばれるパンなどを与えてくれました。そうして駅員の指示でまた列車に乗せられてイリヤという駅に着き、鉄道警察官によつて警察署に連れて行かれたのです。そこでコルホーツの責任者に引き渡されました。一九四八年九月のことです」

コルホーズのイワン所長は親切で、小柄な少年の正雄さんを漁業部門の助手にして育て、ロシア語も覚えさせるように努めてくれたのである。正雄さんにとって、まさに恩人というべき人であつた。

そのお陰で三年後にはとにかく一人前の漁師になつて、一九五九年まで独立した漁師として働いた後、トラクターメカニックの資格を取つて一九六四年まではトラクターオペレーターの仕事をした。

捕まつてから十八年も経ち、一向に救いの手が差し延べられることができなかつた中で、一九六四年六月、戦中に正雄さん同様ロシアからカザフに追われたドイツ系女性のニーナさんと結婚。大型トラックの運転手として四年間働き、さらに一九七〇年にはアンダータルズベリの国営狩猟地区に移つて、獵師としての生活をスタートさせた。毛皮の需要が国際的に高まり、景気のよい状態が続いた時期である。曲折はあつたものの一九八二年、逮捕後三十六年にして「獵師の長老」の別名を持つバルハシ湖・イリー河地区自然保護監察官に任命される。村では「サムライ・ミウラ」の尊称で呼ばれるようになつた。

話はずつと遡るが、正雄さんは大声を挙げて泣いたことがあるという。

「一九五六年のこと、イリーエ駅に特別列車が停まつた。それは日本人抑留兵士を帰国させるために極東方面に向かう汽車だという。ダスピダーニヤ（さよなら）と喜色満面で叫んでいる。私も一緒に帰ると言い飛び乗ろうとしたところ、日本兵が、この汽車に乗れるのは日本の兵隊の

捕虜だけだ。お前はだめだと拒否されたのです。私はイリード駅に一人残され、二度と日本に帰ることはできないのだと胸がつぶれるほど悲しく、大声で泣き叫び、わめきました」

その後日本についての話は絶えて聞くことがなかつたが、一九六七年に、ウズナガチという村に住んでいた日本人・伊藤實さんがひょっこり訪ねてきたのである。また雑誌でカマダ・タカオという日本人がトラクターオペレーターとして労働英雄の勲章を受けたという記事を読み、ジャンブルまでカマダさんを訪ねて行く。彼は日本への帰国を夢見て言葉も忘れていない人だつたが、一九八〇年以前に亡くなつた。

正雄さんは意を決してモスクワの赤十字に家族と窪田家の消息調査を依頼した。何ヵ月か経つて、当時としては奇跡的と言える日本からの手紙を受け取つたのである。

それは窪田氏の奥さんの久子さんからで、小学校四年しか出ていない正雄さんのために全部カタカナで書かれた思いやり深い手紙であつた。窪田氏はすでに亡く息子の英吉君が大きな船を持つて会社を経営しており、正雄さんのことを見習い復員している兄・義雄さんにも知らせたとある。筆者の手元にあるコピーから一部を引こう。

「チチワ サクネンノ十月二十七日ナクナリマシタ。ワツカナイノセキジユウジニキタ アナタカラノテガミヲミテカラナクナリマシタ。テガミヲミテ ヨロコンデオリマシタ」

一方、日本に出す手紙は、帰国希望など書くと、内務省やKGBに知られたら刑務所に送られ

てしまつたことが間違ひなく、帰國に關しては何も書けず、しかも着いたかどうかもわからない時代であつたと述懐する。

アーチー・マーティン

一九八五年、ソ連ではゴルバチヨフが書記長になり、ペレストロイカ、グラスノスチで海外渡航制限がやや緩和され、正雄さんは一九八七年に新聞廣告を見て、毛皮から得た蓄えで日本周遊のクーポン券を買う。平均月収七十ルーブル程度のときに一千三百ルーブルの値段だったから、当時の円換算で五十万円ぐらいの高価なものであつた。折しもアルマトイの建設機械博覽会に来ていた日本の商社マン加藤氏という人と会えたので兄への連絡を頼んでおいたのである。

ようやく日本に到着して、東京港の船の上で、待ち焦がれていた兄・義雄さんと、一九四五年に別れて以来四十二年ぶりの再会を果たしたのであつた。

「年月の経過はお互いの姿を変えていたけれども、面影は残つていました。私は左手首に残る傷痕を見せました。これは子供の頃、玩具のブリキの時計をいつも身につけていたために出来た傷で、義雄兄も覚えていました。私たちは同席してくれた商社マンの通訳で戦後からの半生を語り合おうとしたのですが、KGBの監視で、与えられた時間はわずか二十分だけでした。別れを惜しむ間もなく、手を振つて離れたわけです」

翌日、正雄さんは、思いがけなくも旅行団のうちのカザフグループのリーダーから、仮病を使つて船に残り、港のそばのホテルで兄に会うようにしなさいと言われ、団体のバスが出発した後

に船を抜け出してホテルへ急いだ。北海道へ帰る義雄さんは羽田空港へ行くためにタクシー乗場にて、正雄さんは駆け寄つたものの、通訳はおらず、兄は正雄さんの腕にカタカナで「ゲンキ デイテクダサイ テガミヲクダサイ」と書いてくれた。これが兄と会う最後の機会にならうとは考えもしなかつたのであつた。

一九九一年にソ連が崩壊し、カザフスタンは独立した国家になる。しかし、ソ連崩壊後の経済的混乱で狩猟場は無秩序状態に陥り、ミンクやテンも密猟で姿を消し、村にあった国営狩猟公社も閉鎖に追い込まれた。手紙などは全く届かない状態が続く。

一方、一九九三年には日本大使館がアルマトイに開設され、一九九四年九月に大使館の佐野伸壽氏が、伊藤實さんから聞いたと言つて突然訪ねてきた。アルマトイから三百キロ離れたウシジヤルマ村まで来てくれて、もしあなたの家族がいなくとも、日本にはボランティアの支援組織があり一時帰国ができると話してくれたのである。

「地獄に仮とはこのようなことを言うのですね」。正雄さんに転機が訪れた。

佐野伸壽氏は防衛庁からの出向で九四年に在カザフ日本大使館に勤務。少年時代に子役として映画に出演していた経験もあり、カザフの映画振興に貢献した。同国の映画を携えて東京映画祭でグランプリを得るなど活躍し、多くの世界映画祭に出品している。現在は自衛隊の広報担当(3佐)。

同氏はカザフに日本人同胞が置き去りにされていることを知るや、いち早く訪ね当て、励まし、帰国への途を拓いた行動人である。

佐野氏からの連絡によつて日本サハリン同胞交流協会は直ちに動き、その帰国手続きによつて、正雄さんは、一九九五年六月にモスクワ経由——成田空港着で、ついに日本への一時帰国を果たしたのであつた。

当時の新聞記事にもあるように、このときは、カザフスタンから三浦正雄さん（当時六十二歳）、伊藤實さん（同六十七歳）、森博子さん（同六十二歳）三名の「涙の帰国」であつた。協会は東京・上野のうなぎ屋「伊豆栄」で、ご親族、協会員ともども心からの歓迎会を行つてゐる。

正雄さんは二週間の滞在で親族の消息を知り、札幌で姪の益村美代子さん、高田光子さんと初対面。義雄兄の長女・美代子さんから、兄が亡くなつたこと、それを知らせる手紙を何度も出したことを聞かされた。しかし正雄さんに手紙類が届いたことは一度もなかつたのである。兄と再会後に正雄さんが何度か出したものは、一回だけ兄の手に届いていたという。

美代子さんが書いても届かず、戻ってきた手紙は今も残つてゐる。

「父は、一九九〇年九月十三日亡くなりました。このことをお知らせしたくお手紙を出しましたが、そちらに届かず戻つて参りました。数年前、東京へ弟に会いに行くと言つて出かけたのが昨日のように思い出されます。生きているうちにもう一度会えるだろうかと言い、病院のベッドでも貴方様の手紙を何度も読み返しておりました…」

正雄さんは、姪二人に「まるで父と話しているよう。亡くなつた父とそっくり」と言われて感極まり、胸が詰まつてふるえたと語る。

椎内も訪ねて、亡き窪田氏の長男・英吉さんと会うこともできた。この日宗谷岬ではサハリンの島影が見えた。正雄さんは、四十九年前に小舟で旅立つた大岬の浜を何度も行きつ戻りつし、立ち去り難い思いにふけつた。

カザフスタンでの生活は一段と逼迫し、年金も次第に遅れて、六ヶ月、八ヶ月も支給されないのが当たり前になつてきた。村の病院も郵便局も開いているのかわからない状況になつてきた折、一九六五年五月に正雄さんの妻ニーナさんが心不全で倒れた。

すでに医療システムは崩壊しており、かつて無料だった病院も法外な料金を請求し、しかももともな治療を行わない。正雄さんは妻を村から離れているカブチガイ市の病院に入院させ、医療費のために今まで稼いできたものを吐き出し、それでも足りずに車や残っていた毛皮なども売り払つた。

そのどん底生活の一九九七年五月に再び大使館の佐野氏が顔を見せた。日本に帰任するとのこ



初めて一時帰国して亡兄の娘さん（姪）と会い、「父とそっくり」と言われて胸が詰まる。
(1995年6月)

と。さらに驚いたのは、ウズナガチ村の伊藤實さんが日本に永住帰国したということだった。カザフの映画復興のために協力を惜しまなかつた佐野氏は、帰任した後も所用でカザフに来ることがあつて、正雄さんが持ち始めた永住帰国の希望に対し「日本で子供が働くことは困難で相当な覚悟が要るため、再び一時帰国して自分の目で見て可能性を探つた方がよい」と助言された。

そこで二〇〇一年一月に息子ユーリーさんを連れて再び日本に来て、姪や交流協会と話し合い、さらに伊藤實さん宅にも泊り、厚生労働省とも相談した。

その結果、夫人の心臓の経過を見つづ、一年後の二〇〇二年一月に夫人、息子夫婦、孫と永住したのである。ソ連に拉致されてから実に五十六年を数えた。

幸い息子のミウラ・ユーリーさんは、父の生き様を見て「日本男児の息子の誇り」を持つて来日し勉強したため、所沢の定着促進センターでの日本語の習得も早く、札幌で就業することができた。夫人は所沢の防衛医大で十時間に及ぶ心臓の手術を受けて元気を回復、今は心配もなく正雄さんと暮らすようになっている。

正雄さんは述懐する。「これ以外の選択はなかつた。妻はカザフにいたら死んでいたことは間違ひありません。私はカザフスタンの獵師と呼ばれるようになった男ですが、日本への思いは止み難かつた。死ぬときは父や兄たちが眠る日本で迎えたいと常に考えてきました」



帰国時の正雄さんのパスポートも子供たちのパスポートも「民族・日本」と記されていた。正雄さんは現在、北海道庁、札幌市、東区役所の配慮で、近所に息子一家が住む環境があり、姪の家族が提供してくれた車で魚釣りなどして楽しむこともある。二〇〇九年八月には、娘のリューバさん一家に会うためにクラスノヤルスクまで夫婦で初めてのロシア旅行もできた。

宮城県石巻市に住む永住帰国者の伊藤實さんとともに、まだ永住できないカザフの阿彦哲郎さんが、一時帰国して会えることが楽しみと言う。



森博子さん（右）は、三浦さん、伊藤さんと一緒に初の帰国をして、姉の都沢タマラ夫妻と再会できたが、再び来ることはできません。（1995年6月）

子供はドイツに別れ住む運命の伊藤實さん

「主文 仙台家庭裁判所が昭和39年1月17日にした事件本人伊藤實に対する失踪宣言（戦時死亡宣告）を取り消す。

平成3年1月31日 仙台家庭裁判所石巻支部家事裁判官井上芳郎」

三浦正雄さんにしろ、後述する阿彦哲郎さん、小関吉雄さんにしろ、勝手に国によつて失踪したり死んだことにされてゐる。伊藤實さんも『死んだはずだよ實さん』なのであつた。

伊藤實さんは一九二七年（昭和二年）九月に山形県飽海郡西荒瀬村（現在酒田市）に生まれ、二九年に父母に連れられて樺太野田（のだ）町に移住した。父は製紙工場に勤め、實さんは野田の高等小学校を卒業して樺太鉄道の泊居（とまりおる）機関区で機関士を務めたのである。

敗戦後、鉄道の運転関係者は引揚げを許されず、ソ連軍の管理のもと苛酷な勤務を続けなければならなかつた。一九四六年六月三十日、實さんは一日の勤務を終えた後、人手が足りないからもう一回働けと命令されて機関車を運転していたところ、疲労もあつて、一瞬の居眠りがあつたかもしれない。ある停止信号でブレーキを誤り、停止線より十メートルずれて停止した。二人分の仕事までやり、大きな問題は起こさなかつたのだけれども、故意の列車事故とみなされ、反ソ

連活動罪（刑法59条のB）で、翌日逮捕連行されたのであった。



豊原の刑務所で連日深夜に呼び出されて「裁判」を受け、二年六ヶ月の懲役に服することになった。

まだ夜の明けない時間に大泊（おおどまり）港まで連れて行かれ、そのまま蒸気船でウラジオストクへ。三日後にはハバロフスクの刑務所に移され、一週間後にははるか北方のコムソモールスカヤ・ナ・アムーレのラーゲリ（捕虜収容所）に運ばれて、鉄道建設の重労働に一九四九年一月まで就かされたのであった。

それが終わつて實さんは樺太の家族のもとに帰りたいと希望したが「おまえは罪人である」と許されず、またもやどこへ行くとも知れない列車に乗せられて、とうとうカザフスタンのアルマアタ州ウズナガチ村に送られたのであった。

当時、サハリンから罪を背負わされてシベリアその他に流刑された民間人は、一様に刑期を終えた後も釈放されずに僻地を指定されて労働を強いたものである。そこでは厳重な監視のもと、毎月、村の警察・内務局への出頭が義務付けられ、許可なしには村から出ることも許されない。彼らの持つ証明書は「ヴァルチーパスポート」（狼のパスポート）と呼ばれた。狼は一定の範囲を縛張りにしてそこから出ないのでこの呼称があつた。

しかも民間人抑留者は兵隊の捕虜のように集団ではなく、個人個人が切り離されていて、言葉も通じないので、不安はいつそう募るばかりだった。

渡された紙片に、行くべき地名がロシア語で書いてあつたといつても、そこに到達するのは容易ではない。迷い迷つてカスケレンとかチマルガンとかいう駅を経て、家畜小屋に寝泊まりして、ウズナガチ村に着くまでには二週間もかかったのであつた。そこで彼は二年余り、ソホーツクの百五十頭の牛の牧場で働き、さらに豚の養育場に移る。

しかしこの間、絶望感の中でも、實さんは一九五二年に至つて、彼と同様にソ連の敵国民族であるドイツ系の女性フリーダさんと結ばれ、ソホーツクの豚舎に藁を敷いての新婚生活を始め、曲がりなりにも「家庭」を築いたのであつた。

それでも反ソ連犯罪者のレッテルを付けられていたために正規の婚姻はできず、子供たちは戸籍の上では父なしのドイツ人として登録せざるを得なかつた。

一度、当時の首都であったアルマアタに、日本の音楽家グループがやつてきて演奏をするという話を耳にし、まだ幼い子供たちを連れてひそかに出かけて行つた。何十年ぶりかで目にする同胞の姿に、彼は「ここに忘れ去られた日本人が生きています」と、今にも席を立つて叫びそうになつたという。だが警備している警察官の姿を見て、自分は日本人と話をする前に警察官に捕まるかもしれない。いやいや、もしかしたら日本に帰るきっかけができるかもしれない。しかし連れて行くことができない子供たちはひどい目に遭わされるだろうと思い、迷い、自らの叫び声を

必死にこらえていたのであった。

手紙はすべて検閲され、抑留者の書いたものはその場で没収された。一九五六年に日ソ国交回復を迎えるも、彼らの境遇が改善されることはない。實さんも家族への連絡を何度も試み、またモスクワの日本大使館にも手紙を送ったが、大使館からの返事は一度もない。やはり没収されていたと思われる。

一九七七年に、夫人はペンキ塗りの作業中に事故死。一男二女を残しての突然の出来事に、實さんには絶望の時が続く。もうこのままカザフの大地に埋もれていくのかと諦めかけていたが、母の亡きあと自分をいたわる子供たちを、何とか一人前に育て上げなければならないと思い返す。



やがて時代はゴルバチョフの登場となつた。一九八六年後半以降の急激な改革は、彼の住む村にもゆっくりとではあるが表れてくる。

ペレストロイカ、グラスノスチが叫ばれだしたせいか、実際に珍しいことに、實さんの在モスクワ日本大使館宛の「権太で生き別れになつた家族の消息を確認してほしい」と書いた手紙が、四十四年ぶりに日本に伝えられたのであった。

とはいっても、實さんが手紙を出したのは一九八九年十二月で、石巻市や家族へ連絡が届いたのは翌九〇年の八月である。これを受けた弟妹三人は、誰が言つたのか「實さんはウズベキスタン

ンで死んだ」と聞いていたそうで、「驚くとともに、一日も早い再会を願い、「母も最近は寝たり起きたりの状態です。早く会わせてあげたい」と願つたのであつた。

サハリンで實さんが捕まえられたときには釈放を嘆願して回り、「あの子が死んでいるわけがない」と口ぐせのように言つていた母親初江さんは、大喜びで心待ちしていたが、悔しくも同年十月二十九日石巻市で逝去される。九十三歳。

實さんはモスクワまで行つて帰国を待つ間に母の死を知ることになる。

この年、一九九〇年は協会が本格的にサハリンからの集団一時帰国支援を始めた年にも当たり、後払いながらも国から旅費が支給され、その翌年には滞在費も出されるようになつていくのだが、伊藤實さん関係の当時の資料を読むと、「一九九〇・九・三〇「県担当部門から家族の意向について照会あり」、一一・一〇「石巻市より一時帰国引受に関する証明書の記入について連絡。県担当部門よりハバロフスク経由で帰国すれば樺太同様の交通費が支給されるが、モスクワ経由では難しいとの通知あり」などとある。とにかく同胞を一刻も早く肉親に会わせようとする態度が見受けられない。かくて母の死後一ヶ月経つて、十一月二十七日、實さんは次女ヴエラさんとともに、やつと成田に到着したのであつた。

實さんは弟の宏さんの家に泊まりながら九十日間滞在して、親族はもちろんのこと、思いがけないことに、樺太野田町、鉄道機関区の旧友、知人たちからも大歓迎を受けたのであつた。

母の四九日法要には慟哭し、ただ突つ伏すだけであった。死んだはずの自分の名が刻まれていたお墓に、今度は母の名が刻まれたのである。

石巻市から、東京、北海道、青森、弘前をも回り、そして生地で父の実家のある酒田市にも二回出かけている。この間に、ほとんど忘れていた日本語も思い出し、知人の誘いに乗つてカラオケのマイクも握つたという。

彼の声を聞こう。「四十余年間生死すらわからなかつた私の家族をとうとう知ることができたのです。この嬉しさをどう表現すればよいのかわかりません。私は一時帰国できました。しかし残念ながら母は私が到着する直前にこの世の人ではなくなつっていたのです。それでも私は弟妹たちと会い、不思議なことに四十年以上も使わず忘れていた日本語が溢れ出すように自分の口から出てくるのです。カザフに戻ったときには、逆にロシア語が出てこない自分に驚きました。あれだけ苦しく慘めだった長い年月が、ほんの一枚の紙切れの厚さのようになつて、十八歳までの日本での時間と現在の時間を隔てているだけにしか感じられなか



とうとう永住帰国して、恩人の佐野伸壽さん（左）に迎えられる。（1997年春）

つたのです」

一時帰国後の彼には大きな悩みが待っていた。

「日本からカザフに帰つてみると様々な変化が起つっていました。亡くなつた妻の家族がドイツに移住したいと言い出したのです。ドイツの国は、旧ソ連にいたドイツ系の住民を積極的に受け入れる政策を取り始めていて、ドイツは魅力的な新天地に映りました。そんな中、長男のミハイルが自分もドイツに行きたいと言うのです。確かに戸籍の上ではドイツ系住民ということになつていたが、顔形は明らかに私の血を引いた日本人なのです。息子は、僕は大学も出ていないし、ここではもう何ともなりはしない。今だつたら若いし何とかなるような気がする、と言うのです。ミハイルは学校での成績も飛び抜けて良かったのですが、法律的には私とかかわりがないことになつていても、反ソ連活動者の息子であることは周知のこと。大学へ進む道も閉ざされていました。一度共産党の職員と名乗る男がやつてきて、お金を払えば大学に進学させてやると言われたので、苦しい家計の中からかき集めて支払つたが、男は金を持って姿をくらましたのです。私は自分という存在があるために大学にも行けない息子に済まないという気持ちが心の隅に残るようになりました。息子と別れて暮らしたくなかつたけれども、最後のところでどうしても強く反対することができず、九一年三月に長男一家はドイツに移住したわけです」

ドイツ（当時は西ドイツ）政府は、一九五〇年に「捕虜の家族のための生活扶助に関する法律」「帰還兵援護措置法」を、さらに五四年には「元捕虜の補償に関する法律」を制定して国家補償を行

つて いるが、これはソ連に抑留されていた家族に対しても就職、住宅、年金等の斡旋、援護の措置をとるというものであった。



時代はいよいよソ連の崩壊を迎える、「真昼の暗黒」のような時期は終焉して自由の時代がやつてきたように見えた。しかし経済情勢は日を追うごとに悪化、村の生活も大打撃を受ける。まず日用品の値段が急激に上がり始め、次に毎月の年金が徐々に遅れて、ついに全く貰えない状況になつた。薬は無くなり医療機関は潰滅的な状態。村の学校から先生がいなくなつたと聞く。

かくて一九九六年になって、娘たちが「もうここで生きていくことはできない。兄さんのいるドイツにお父さんも一緒に行こう」と言い出すようになる。

「事実、子供たちの生活はほんとうにひどいものでした。ちょっとでもお金になりそうなことがあれば何でもして、それでも十分な収入は得られず、精神的にもすさま、疲れていくのが私は痛いぐらいわかるのです。幸い五年前にドイツへ行つた長男は生活の基盤が整い、ひとかどの暮らししが出来るようになつていました。娘たちは長男と相談し、すでにドイツに行くことを決めていたようです。気がかりなのはやはり私のことで、彼女らの願いは私も一緒に移住することでした。私はドイツ系住民ではなく、まして息子たちと法律的にはつながっていない。子供たちも役場に行つて相談したが、不可能だったようでした。私たちは長い間議論しました。このままここに残つてしまつたらいかは家族全員がのたれ死にしてしまうかも知れない。私はついに子供

たちにドイツへ行くことを勧めたのです。私が一緒にに行けないことはよくわかつています。私にとって祖国は日本しかないのです。子供は心配してくれます。実際、ソ連時代にあれほど世界に誇っていた福祉制度も完全に麻痺し、一人でここにいることは死を意味すると子供たちは言います。私もせっかく再会できた日本の親族にも知られず、誰からも看取られずに死ぬということに得体の知れない恐怖を感じました。ちょうどそんなときに、巡り合わせと言いましょうか、日本大使館の佐野伸壽さんを通じて、永住帰国という方法があることを知り、帰国を決意したのです。佐野氏と日本サハリン同胞交流協会の手引きで、日本に永住する道を選ぶことができたのです」

一九九七年三月、伊藤實さんは日本に帰り、石巻市に定着した。一時帰国のときに世話をしてくれた弟さんはすでに亡くなっていたが、妹・寺崎昌子さんの近くに住むことになった。樺太を離れてから実に五十一年ぶりのことであった。

それ以降、ドイツとの往来は盛んである。子供や孫は實さんを訪ねてきては二間だけの狭い部屋に重なり合つて泊まり、話が尽きることはない。實さんも負けずに一人でドイツへ子供と孫の顔を見に出かける。二〇〇九年四月から五月にかけても行つてきた。今年、二〇一〇年夏は娘二人が揃つて来る、という連絡があった。

二〇〇九年二月十日の朝日新聞東北版は實さんの生涯を紹介し、その末尾に、息子のミハイルさんが、父親が樺太で疲労から事故を起こしたことに触れて語った言葉を載せていく。

「父さん、サハリンでよくぞ居眠りしてくれた。父さんが居眠りしてくれなければ、私たちは

生まれなかつたんだよ」

なるほど人生とはそういうものかと、伊藤實さんは腑に落ちた。

今ドイツに子供三人のほか、六人の孫と、二〇一〇年春になつて生まれた二人を加えた六人のひ孫がおり、六月頃にはもう一人ふえる予定と言う。居眠りはしたが、健気な子孫を残した八十二歳のおじいさんである。



ドイツに移住した子供たちはみな幸せに暮らしているという。夏休みには、孫娘のジェニーヤさんとアリーナさんが、ともに夫を伴って来訪。(2008年8月、仙台で)

いまだ帰れず　日本人墓地守る　阿彌哲郎さん

前項で紹介した伊藤實さんと仲良しで、いまだにカザフスタン北部寒冷地のカラガンダに住み、日本人墓地を守つて、厚生労働省の遺骨収集などがあれば協力しているのが阿彌哲郎さん（七十九歳）である。伊藤實さんは一九九〇年代初めにテレビ局の取材が縁で対面して名乗り合い、二人で日本人の墓地の調査や同胞探しを行つた間柄である。

二〇〇六年九月に、当時新しくカザフスタンの首都になつたアスタナの空港建設に加わつていたPCI（パシフィックコンサルティング）の下藤雄之所長から協会に連絡文が入つた。それには、哲郎さんや大使館員と一緒に、軍管理下にあつて立入禁止区域になつていたスパスク国際捕虜収容所（障害3～4級用）の跡地に初めて立ち入ることができたこと、かつてここに入れられていた哲郎さんも感無量で、興奮して早口のロシア語で説明するのを、司令官が真剣に聴き入れていたのが印象的だつたと、跡地の詳細を含めて知らせてきたものである。

ゲートを入つて三メートル幅ほどの逃亡防止堀、収容長屋の廃屋、崩壊した食堂跡、赤錆びた廃棄ダクト。収容所から「国際墓地」までは窪地の堀をはさんで約一・五キロある。障害者にとつてはとてもない急坂を昇り降りして死者を埋葬しなければならない毎日。寒さと空腹、誰も助けに来ることもない収容所の周りは、今も一面の草原が残るのみ。

下藤氏は最後に「これを映画に残して、戦争犯罪を形骸化する路線に追随する日本の若者に見せたい。こういう中にいた日本人がまだ生き延びているのだと」と結んでいる。

哲郎さんの父母及び本人の本籍は山形県酒田市。漁業を営む阿彦家の三男として一九三〇年（昭和五年）十一月に樺太本斗（ほんと）町で出生。本斗小学校高等科を卒業後、町内の渡辺鉄工所で働きながら本斗青年学校に通い、青年学校では級長だったという。その責任感から、家族が引揚げるときに、母が「哲郎も黙つて船に乗つてしまいなさい」と勧めても、一緒に船に乗らなかつたことを弟さんは後々まで悔やんでいたものである。ソ連側の監視が厳しい中でそれが出来たかどうかは別として、彼は父と残り、母と姉弟五人は日本の土を踏むことができた。

敗戦時は樺太庁の指示で、婦女子の引揚げを優先するため数え年十五歳以上の男子は残れということになり、また住民はみな義勇隊に組織されていたので、本斗の青年学校も「303部隊」の名称でにわか兵隊になつて活動していた。

青年学校というのは、戦時中全国の市町村に設置されており、小学校、高等小学校卒業後の勤労青年に実務教育、軍事教練を行い、在郷軍人が指揮をとつていたものである。

哲郎さんが働いていた鉄工所は戦後ソ連に接収されて造船所になつたので、彼はそこで船舶修理の仕事に従事することになった。

一九四八年六月、突然ソ連警察に逮捕され、豊原の刑務所に入れられた。本人には何のことやら

らわからない。けれども刑務所に六ヶ月留置された後に「ソ連刑法58条、ヴレジイチエリ容疑」で十年の判決を受ける。反ソ連扇動者という意味のようだ。当時はダモイ（帰国）したい人間がソ連当局の歓心を買って取り入ろうと、誰々は軍人だつたとか、反ソ連のスペイだなどと密告する例が多かつた。

彼も前記の「303部隊の責任者」という口実で犠牲になつたことは間違いないようである。それにしても、戦後三年近く経つてからのことであつた。ちょうどこの頃、吉原俊雄さん（シベリア・カンスクで死去）も、青年学校の武器であつた竹槍その他を埋めて隠していたと密告されて、豊原で逮捕されている。

当時サハリンでは、故・矢口正さん（八十五歳で豊原で死去、茨城県八郷町出身）のように、同胞を売る密告者を憎み、殴り殺して十五年の刑を受けた人もいた。



哲郎さんは、最初の一年間は豊原刑務所で、真っ暗な中で食事もろくに与えられなかつた。「睡眠妨害、絶食」という拷問があつたことはよく知られた事実である。この間、誰が書いたのか、壁に刻まれていた「父母妻子兄弟姉妹健在にて我の拘留の有様を知らず」という文字を見続けたという。

その後は大陸に連行され、ウラジオストク、ハバロフスク等の収容所を転々と回され炭鉱で労働。最後ははるばるカザフスタンまで送られて、ジスガスガン鉱山で鉱石採掘をやらされたので

ある。

苛酷な労働のために約三年間で、健康体（1級）だった身体は骨と皮ばかりになつた。彼は筆者に当時のことを「骨になつたのです。肉はなかつたのです」と説明する。日本語の「瘦せた」という言葉を探しあぐね、しぶり出した表現であった。

体格が4級に落とされて、一九五一年には障害者の集められるカラガンダのスパスク収容所に移された。ここには病気や、手足が無く、死ぬのを待つような人ばかりが入れられていた。雪が降る前には連日交替で埋葬用の穴掘り作業が続く。冬は凍つて穴を掘れないでの、その前に用意しておいて、死んだ人はどんどん穴に埋められていった。「眞実、自分もこうなるのだと感じていたのです」

一九五三年三月にスターリンが死去したことにより、翌五四年四月『恩赦』ということになるが、これも形ばかりのもので、今度はアクタスという地に行かされることになった。そこには炭鉱や煉瓦工場があつたけれども、哲郎さんには身分証明書がなく、かつ定期的に警察に出頭しなければならないため、働くこともできず、食べることができない状態に陥る。ようやくにしてセメントを倉庫に運ぶ仕事が見つかった。この仕事はセメントの粉が飛んで口や目に入るのを誰も嫌つてやりたがらないので、職のない彼は金がもらえるので、頑張つて続けた。

実はセメント工場の方には日本兵が六人いたが、一九五六年に日本にダモイした。哲郎さんは民間人だから兵隊の名簿に入つていないので帰国は叶わず、どんなに悔しかつたかしれなかつた

としみじみ言う。

考えてみれば捕虜には罪名はないようだが、自分には重い罪名がある。こんなばかなことが許されるかと怒つてもどうしようもない歯痒さ、いらだたしさがあつた。

カザフはまだソ連に属する一共和国で、日本大使館もない時代であり、哲郎さんは、在モスクワ大使館に手紙を出したが届く様子は全くなかった。「アヒコテツロウと申す日本人です。帰国を希望します」と何度も書いたことか。

日本兵が帰国するのを見た後、絶望と厳しい労働のさなか、哲郎さんを励まし続けたのは、建築現場でセメントの製造に従事していたドイツ系の女性工カテリーナさんであつた。そして一九五六年暮れに結婚したことで、彼はどん底からかい上がり生きる力を与えられていった。夫婦はセメント工場で一緒に働き、彼はやがて溶接工になつて、一男一女も授かる。息子にはテルオ（輝男）、娘にはイリナ（入菜）と日本名をつけ、やつと落ち着いた生活を得たのであつた。

しかし妻は一九八三年十月、クレーンに吊り下げられていた鉄材が落下して、その下敷きになる事故で命を落とす。

その後、彼は電気溶接の仕事に移つて、子供を育てるが、妻の死後三年経つて再婚している。モルドバ系のエレーナさんである。



哲郎さんが協会の招待で初めて日本に一時帰国したのは、一九九四年七月のことだつた。当時六十四歳。成田空港では日本語は口から全く出てこないので、「おう、おう」ともどかしそうに呼びかける様子が人目を引いた。

空港には、北海道石狩市の弟・藤井祐三さん、北海道保護課、協会役員のほか、慰靈の旅に行きカラガンダの墓地で哲郎さんと会い、弟の藤井さんに連絡をして帰国のきっかけを作った奈良県の野村利男さん（元捕虜、当時七十一歳）も顔を揃えていた。

約三十日間の滞在中には、首を長くして

待つていた酒田市のお姉さん、北海道枝幸町の妹さんとも四十九年ぶりの再会を喜び合い、酒田市では市長さんたちの歓迎を受け、両親のお墓参りも済ませることができた。北海道では樺太本斗町時代の同級生にまで迎えられ、その席で彼は「螢の光」「仰げば尊し」をはつきりした日本語で歌うことができたという。

哲郎さんは古い歌や軍歌をよく覚えている。百人一首も好きだったから、読み手のカラ札一枚



いつ来ても弟や仲間たちが迎えてくれるのが嬉しいと
阿彦さん（右）左端は娘のイリナさん。
(2009年11月、札幌の三浦さん宅前で)

「からからと、からおけ下げる、から買ひに、けちなとうふ屋からもくれない」などと披露する。毎日毎日、昔使つた日本語を思い出し、いささか新聞も読めるようになる。「自分は悪いことをして捕まつたのではない。そのことを訴えたいのに、新聞は書いてくれるのが不満だ」などとつぶやくようになつていた。

海のない寒冷地のカザフスタンから北海道へ来て、漁業を営む弟さんと釣りをした嬉しさを、皺の深い顔をほころばせながら何度も何度も語る姿が印象的であつた。

現在、哲郎さんは年金生活である。娘イリナさんはカラガンダの商店で働き、息子テルオさんは結婚してロシアのサンクトペテルブルグに住んでいたが、今は別れて父の元に戻り、炭鉱の機械修理に従事している。

自慢の息子は以前はカザフを代表する重量挙げの選手で、海外遠征もしばしばだつた。すぐれた選手には国の援助も手厚かつたことから、やや豊かな暮らしもできただこともあつたが、いまは経済的な困難が続き、人々は職に就くことも容易ではないという。



哲郎さんは、九九年一月に再度の一時帰国をしたときには、佐野伸壽氏宅、伊藤實さん宅にも招待されて泊まつており、日本への永住を勧められているが、決心がつきかねていた。二〇〇六年十月にエレーナ夫人と一時帰国した際には、四年前に永住した三浦正雄さん宅に伊藤實さんと

一緒に泊まつていろいろと相談した結果、哲郎さん夫妻も永住帰国を希望するようになつて手続きに入つた。しかしながらザフに戻つてみると、ドイツに在住している夫人の子供たちは大反対。このため断念せざるを得なかつたという経緯がある。

二〇〇九年十一月、哲郎さんはイリナさんを連れて一時帰国したが、すでにこの月に七十九歳。十七歳で連れ去られてから六十余年になる。親族も知人も減つていくが、ともにカザフで生き抜いてきた三浦さん、伊藤さん、支援し続ける佐野氏らがいる限り、彼は心を励まして日本人墓地を守りつつカザフスタン現地に留まり続けるのだろうか。

哲郎さんにお土産を上げたいと言うと、「すり鉢がほしい。じゃが芋をすつて芋餅を作りたい」と言う。我々が少年時代に食べたものである。「すりこぎは自分で木を削つて作るから要らない」と遠慮するところが彼らしいが、幸い札幌の商店に品物が揃つていた。今頃、彼はすり鉢とすりこぎで芋餅を作りながら、日本を想つてることであろう。



ともにカザフで苦労を重ねた伊藤實さんと祝杯。

望郷四十七年、死亡宣告の小関吉雄さん

長年カザフスタンに放置されたままになっていた日本人小関吉雄さん（当時七十三歳）の生存情報が日本サハリン同胞交流協会にもたらされたのは、一九九三年（平成五年）六月のことであった。このことを知らされた日本の妹弟七人は、えつ、本当かと疑つたのも無理はない。日本は、「一九六一年（昭和三十六年）三月三十一日に死亡」とみなし、一九六五年に戦時死亡宣告を行つていたのであるから。

さらに詳細な報告がもたらされ、実際に兄が生きており、しかも日本に帰国できるかもしれないといと聞いて驚喜したのであつた。当時早速ご家族から協会に届いた手紙には「異国で長い間辛い思いをしたでしょうに。どんな思いで、どんなに帰りたいだらうと思うと、私共もたまらなくなります」と、一日も早い再会への期待を表明していた。

母とくよさんはこの十二年前に亡くなつていたが、とくよさん宛、戦時死亡宣告に伴う総理大臣名の文書は次の通りで、どの対象者に対しても同文のもの。個人名だけを書き込む形式のものである。

「小関吉雄殿の御消息については終戦以来長年月にわたり調査究明に手段を尽くして参りまし

たが今日なおこれを明らかにすることはまことに遺憾に堪えません 今般戦時死亡宣告がなされたのに当たり遠く海外において悲境のもとに消息をたたれた当時の状況に思いをいたしかつ多年帰還の日を待望されつつ今日に至られた留守家族の御心情を察しつつしんに衷心より弔慰の意を表します 昭和四十年二月二十七日 内閣総理大臣 佐藤栄作』

まことに空疎な文章というほかない。一九五〇年以降カザフスタンに数十名の民間同胞があり、その中には小関吉雄、三浦正雄、阿彦哲郎の名もあつた。長い間、政府に要請しても「調査」も行わず、どんな「手段を尽くした」かも示されず、「まことに遺憾」なのは家族の方々であろう。つつしんで死亡とされた同胞がいかに多かつたことか。

呆れたことに、総理大臣名さえ無い文書がつい先年も問題になつていて。シベリア帰還者への特別給付金支給は自民・公明両党の反対で否決されたが、二〇〇七年四月から慰労品贈呈ということになり、総理大臣の感謝状も贈られることになつた。ところが「心からの慰藉の念を表します」というこの感謝状には総理大臣の氏名も、受取人の氏名の記入もなく、日付さえも入っていないなかつた。多くの人が憤慨して送り返したのは当然といえよう。

ついでに言えば、小関家の長女・渡守テルさんによると、戦時死亡ということでたしか二万八千円が支払われたと思うと言う。それで死亡通告による戸籍の改訂のために市役所へ行つたら、「そんなことはあり得ない。戦病死でなければ受け付けられない」とか、「本人の委任状を

持つてこい」と言われたそうである。死んだといわれた人の委任状があり得るのか。

一九九三年春にもこういうことがあった。神奈川県の婦人が協会を訪ねてきて、父がシベリアで死亡していたことがわかつたので市役所に戸籍の整理を申し入れたら、「外国で死んだのなら本人のパスポートを持つてこい」と言われたとの訴え。筆者が役所に同道して「シベリアに抑留された者にパスポートがあると思うのか。遊びに行つたのではないのだ」と抗議したことがあるが、市役所や関係官庁での無知、無理解は今でも無いわけではない。



小関吉雄さんは一九一九年（大正八年）十二月北海道白糠村で生まれ、一九二一年に両親と樺太野田町に渡った。吉雄さんは野田高等小学校卒。一家は恵須取（えすとる）町に移り、吉雄さんは隣町の塔路（とうろ）三菱鉱業所で働くことになる。ところが、太平洋戦争の激化で輸送船が相次いで沈められ、樺太から本州への石炭輸送が困難になつて、南樺太全域から朝鮮出身の労務者も含め九千名が徴用令で九州、常磐などに配置転換させられた。吉雄さんは一九四四年（昭和十九年）八月二十五日、第一陣として長崎の崎戸鉱業所に赴任させられたのである。兄の正雄さんも、九月に高島炭鉱へ行かされてしまう。

敗戦を迎える、サハリンと名を変えた樺太との連絡は途絶。父は一九四〇年に死去しているし、男の働き手を失つた樺太の母、樺太に渡つてから生まれた妹、弟はどうなつたのか。終戦の詔勅

など関係なしに、恵須取、塔路はソ連軍の猛爆を受けて街は炎上、八月十六日には完全に占領されたと伝わつてくる。九州の炭鉱から退職になつた長男正雄さん、次男吉雄さんと、茨城県土浦で予科練（海軍飛行予科練習生）を除隊になつた三男豊治さんは、次々と室蘭の叔母の家に落ち合つたが、心配は募るばかりだつた。

三人は、樺太に渡ることを相談した。長兄も弟も、自分が行くと主張する。けれども、職を得て独立しなければ叔母様の家に迷惑をかけるばかりだと、結局、兄は三井芦別炭鉱へ、弟は三菱美唄炭鉱で働くことにして、吉雄さんが渡航の道を探ることになる。ただ吉雄さんは弟の豊治さんには、炭鉱は危険だから砂川の東洋高圧あたりを目指した方がよいと言つていた。その弟は、吉雄さんが樺太に密航した一ヶ月後の一九四六年七月十一日に落盤事故で死亡しているのである。

吉雄さんは何度か渡航を試みたが、悪天候などで順延。ようやく敗戦翌年の一九四六年六月五日、北海道稚内港から、同じ樺太塔路と長崎崎戸で働いた菊地文吾さんら数人と乗り合わせて小舟でサハリンを目指したが、翌六日に真岡（ホルムスク）を目前にしてソ連軍に逮捕されてしまった。

真岡において、十月十五日に至り有罪判決。同月末にウラジオストクに連行され、さらにイルクーツクやマリンスクで強制労働。一九四七年八月には、もう釈放されるかと思いきや、カザフスタンに送られ、天山山脈の麓で、新聞、ラジオも、郵便局なども無い僻地タルガールの集団農

場や、皮革工場で働くことになった。

警察から「抑留のことは一切話してはならぬ」と厳命され、日本人であることも隠し続けざるを得なかつた。言葉もよくわからない中での制約は想像を絶するもので、ましてや日本に連絡する方法など考えられなかつた。



実は吉雄さんが判決を受ける頃だらう。一九四六年秋のある日、恵須取の小関さんの家に若い男性が来て一枚のメモを置いて去つた。母親が不在のときで、あとで見ると「豊原の刑務所に小関吉雄が入つてゐる。寒いので着る物を届けてほしい」とある。電話もなく郵便も届かない、汽車もろくに動いていない時代のこと。とにかく捜そうと弟の進さんがリュックに衣類を詰めて豊原まで行つたものの、どこに刑務所があるのか、市内の主な建物はみな刑務所みたいになつてゐるようだが、見つけることは不可能で戻つてきた。入れ代わつて長女キヨさんが卵巣膿腫の病を持つ身体ながら、吉雄さんの身を案じて探しに出かけた。おそらく吉雄さんが大陸に連行された後だつたであろう。その姉がなぜか消息不明になり、どうしたことかと家族は心配していたが、翌年七月、家族に引揚許可が出て明日出発という日にひよつこり帰つて來た。ソ連将校の家に住まわされ、洋裁の得意なキヨさんは毎日ミシンがけで働くことになつたが、母親たち一家は一九四七年七月に日本

キヨさんはやや遅れて引揚許可が出ることになつたが、母親たち一家は一九四七年七月に日本

に引き揚げることができた。七月十一日に北海道函館港に着く。函館で出迎えた正雄兄は、「吉雄はどうしたのか」と聞き、そこで初めて逮捕されたことを知るのである。

この日は奇しくも弟の豊治さんが炭鉱で事故死してちょうど一周忌にあたる日であった。一家は室蘭の叔母を頼った後に岩別の炭鉱街に住み、キヨさんは手術後に得意のシンガーミシンで稼ぎ、進さんは炭鉱で働くが、やがて転職や結婚で札幌市や千葉県に移り住む。これらのこととは吉雄さんには知る由もなかつた。

吉雄さんは、カザフのアルマアタ近郊に若干の同胞がいたらしいことは聞いていたが、警察の監視もあり、お互に身元を隠していたので何人が生存していたのかは不明だった。一緒にサハリンに密航し同じ運命をたどった菊地文吾さん（大正五年生まれ）はコルホーズで羊毛の刈り取り作業をしていたが、一九七九年に肺癌で死去。吉田弘一さんという人は、たばこの葉の生産に従事していて、吉雄さんが初帰国する十五年ほど前に死去したことであつた。三浦正雄という人もいるはずだと聞いていたが、お互に対面できたのは、のちに日本に帰国してからのことである。

吉雄さんは、現地で孤立した状態の中で何くれとなく世話をしてくれた、両親が政治犯で行方不明になつてゐるロシア女性エカテリーナさんと一九五二年に結婚し、唯一の心の依り所を得た。母親似のガーリヤが生まれ、その成長を楽しみにささやかでも充実した生活をしていたのに、夫

人は一九七五年に心不全で急死した。

彼はこの間、「おれは日本男児だ」と意地を張つて無国籍で通したが、やむなく子供の都合もあつてソ連国籍を取得したのは一九八一年四月に至つてからである。そして娘さん夫婦と三人の孫との生活を続けていたのであった。



一九九三年五月に、カザフの首都だったアルマトイで「日本産業見本市」が開かれることが耳にした吉雄さんは、日本懐かしさのあまり、郊外のタルガルスキーからその会場を訪れたのであつた。

日本人らしい人がいたので声をかけたが、五十年近くも日本語を使う環境になかつたため、言葉が出てこない。しかし「幸運というのはまさにこのことだった」と吉雄さんが後に述懐したが、その人、日ロ貿易協会の寺尾近三氏が日本語で話しかけてくれた。吉雄さんは自分の生い立ちと戦後の経過をとつとつと説明し、日本の親族と会いたいと訴えたのであった。寺尾氏がすぐさま私たちの協会に連絡してきたことは言うまでもない。

その二ヵ月後、千葉市に住み水道工事の会社を経営していた四男の弟・小関進さんは、協会が急ぎ作成した招待書類と、姉弟でかき集めた吉雄さんの渡航費用を持つて、七月二十五日に成田空港を発ち、カザフスタンに急いだ。現地で間違いなく兄の吉雄さんであることを確認し抱き合

つたのである。耳は遠いし、日本語は大半忘れていても、肉親の心は痛いほど通い合つたといふ。

ちょうどアルマアタには日本の大使館ができたばかりだったが、寺尾氏の活動を伝え聞いた松井大使、徳永領事らが進さんと対面し、夕食を共にして励まして、一時帰国、さらには永住帰国に向けて協力されたことは記憶に留めておきたい。

進さんは、吉雄さんが娘夫婦、孫三人と生活していること、肺や気管支に支障があり、咳こむことがある等の報告と、写真を持って八月三日に帰国した。

吉雄さんの帰国手続きはカザフ側の出国許可の遅れによつて長引き、妹弟たちが期待した兄の誕生日十二月十八日には間に合わなかつたものの、十二月二十日、孫娘アイーダさんを伴つてついに日本への一時帰国を果たしたのであつた。

カザフ当局から発行された吉雄さんの帰国旅券も、孫のパスポートも「民族・日本」とある。

千葉県と北海道から集まつた七人のきょうだいのすがり合う姿をどう表現できようか。十人のうち吉雄さんを除き一人は亡くなつていたけれども、あの幼かつた妹弟たちはすでに六十八歳から五十五歳という年齢になつていたのである。ただ吉雄さんにとって、この場に炭鉱で亡くなつた豊治さんがいないことは無性に寂しいことであつた。

一家の安否を気遣つてサハリンに密航し、逮捕された兄に対する家族の感情は格別なものがあつたろう。「私は幸子」「おれは潔だよ」と叫ぶ声に、吉雄さんは、ただ「ああ、おう」と溢れる涙を拭うのみであつた。

吉雄さんは、日本の懐かしい赤飯、ちらし寿司の歓待。夢を見ているんじやないかと疑う気持ちさえ湧いたという。

弟の進さんは「五十年の埋め合わせを私たちきょうだい全員でするつもりです」と語っていた。本人の申立と協会の要請に基づき、札幌家裁は吉雄さんの滞在中の一九九四年一月十五日付で「戦時死亡宣告を取り消す」との審判を下している。

吉雄さんはいつたんカザフに戻り、一九九四年七月に日本に永住帰国して、妹の渡守テルさんや吉良俊子さんの住んでいる千葉県松戸市に居を定め、お金を貯めてはカザフの娘や孫たちを日本に招待することを楽しみにしながら生きてきた。

吉雄さんは酒もたばこもやらない。日本語の読み書きについては回復し、本は好きだし、購読していた東京新聞を隅まで読む。炊事は一人で作り、ご飯、味噌汁、刺身を好んだ。魚は鮭が気についたようだ。テレビでは洋画と時代物、スポーツではサッカー、相撲で、相撲には相当詳しくなってきた。

だからといって、本人が日本に帰国できて、それで人生の完結、めでたしというわけにはいかないのは誰の場合も同様である。

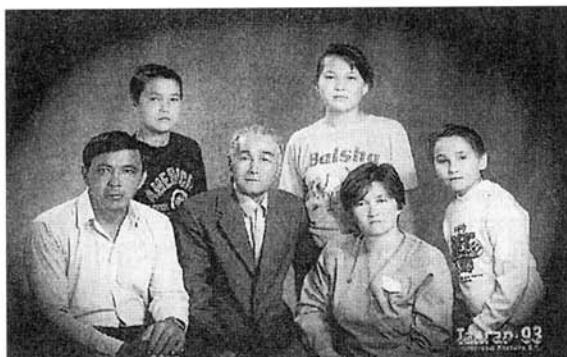
残してきた娘夫婦、孫たちは、喘息持ちの「おじいちゃん」の健康を心配して手紙をくれる。

おじいちゃんは、娘の家の修理にお金がかかつたり、冬の石炭が足りなくなつていなかと気がかかる。

「夫には今仕事はありません。修理工場なのに部品がないからです。十月分の給料は食肉で支払われました。今年の秋はずつと電灯のスイッチが切られ、ガスもちょくちょく出なくなります。仕事を見つけるには賄賂を払うかコネがないとダメです」と書かれた娘の手紙も、投函するにはアルマトイまで行かなくてはならない。それでも吉雄さんにとっては、娘や孫との手紙のやりとりが心の癒しになつていたのであつた。

二〇〇七年六月六日朝、吉雄さんは、妹の吉良俊子さんが起こしに行つても寝たままだつた。十時半頃になつてもまだ起きてこないので見に行つたところ、呼吸が止まつていたので救急車で市立病院に運んだ。前日の夕食も平常通り摺り、頭もはつきりしていたし、八十七歳の安らかな寝顔であつたと家人は言う。

前年九月二十七日に心不全、肺気腫の悪化ということで入院したときには、カザフの娘ガーリヤさんと孫のアイダさんが一ヶ月近く看病に来てくれたのでたいへん喜び、



日本に永住帰国するにあたり娘さん一家と記念撮影する小関さん（中央）（1993年夏）

協会役員らがお見舞いしたときには、廊下の向こうから本人が手を振つて歩いてくるほどの、見違えるような元気さであったのにと、惜しまれる。



二〇一〇年四月現在、あのカザフまで来てくれた進さんは胃癌で亡くなつたほか、弟妹相次いで世を去り、次女の渡守テルさん（八十六歳）をはじめ札幌の美佐子さん、松戸の俊子さんのみ健在。ご遺族は今も、生活困難なカザフの家族に支援金を送つたりして励ましているのである。

末妹の吉良俊子さんは語る。

「肺に水が溜まつたりして通院の必要があり、お医者さんの勧めで、亡くなる半年前から私の家に住むようになりました。兄は無口な人ですが、姉のテルが来ると喜んで肩を抱くよにして話すのです。でも晩年は楽しそうな顔は少なくなつた。かわいそなのは、カザフという国が遠過ぎることですね。家族のことを思うと自分が帰つてきて良かったのかどうか、悩むこともあつたようです」



カザフから娘さんとお孫さんが看病に来たため驚くほどの回復を見せていた小関さん。左は妹の渡守テルさん。

(2006年11月、松戸市で)

いにオイオイ泣くこともありました。微用も抑留も国のために翻弄された結果だ、悔しいと口走ることもありました。」

俊子さんは看護婦だが、今は千葉県の総合病院で電話医療相談をやっている。受診の相談、悩みごとの訴え、はては電話口で怒鳴り散らす者もいる。世相が見える、人生が見える。「なあに、吉雄兄が味わってきたことに比べれば、あなたの悩みなんて何でもないことよ」と言いたい気持ちになる。

孫娘のアイーダさんは二〇〇九年秋に結婚し、二〇一〇年夏には出産するという。初のひ孫を見ることなく逝つた吉雄さんの無念はいかばかりか。

父の執念、四十一年ぶりに妻子を捜し当てた松元家のこと

満洲から父がソ連軍によつて連行された後、残された家族もシベリアやカザフスタンに移住させられた例は多い。ここでは松元家の一例だけを取り上げておこう。

松元万里子さん（一九三八年生まれ）、あき子さん（三九年生）、正男さん（四〇年生）、雪男さん（四二年生）の四姉弟は、満洲北西部のソ満国境に近い満洲里で、父松元三郎さん、母アストラハンツエワ フイワさんの間に生まれた。

父・三郎さんの出身地は九州の鹿児島県だが、三郎さんの父は、息子がロシア女性と結婚することに反対であり、三郎さんの実家からは「結婚するなら切



敗戦で父がシベリアに連行される前の一家。
松元三郎さん夫妻の前に、万里子、あき子、
正男、雪男さんの姉弟が—。

（1943年頃、満州里で）

腹せよ」と日本刀が送られてきたと、子供たちは聞かされている。

時代の風潮や薩摩の気風もあつたろう。三郎さんは日本人学校の教師であったが、ロシア女性との結婚が理由で教師を辞めさせられ、一家を養うために仕事を転々とし、苦力（クーリー、下級日雇労働者）までして働いたということであった。

住んでいた地域はほとんど日本人であつたし、母も日本語を話せたので日本人との付き合いは多かつた。万里子さんは日本人学校に入学するずっと前に父がランドセルを買っておいてくれたことをはつきり覚えている。その後一九四三年五月に父は軍に召集され、敗戦でソ連の捕虜になる。以来一九八五年に父がカザフスタンまで捜しに来て再会するに至る四十一年間、父の顔を見るることはなかつた。

母は満洲当時の家族の写真を戦中戦後を通じて大切に保管しており、万里子さんが日本に永住帰国する一〇〇〇年や、近くは一〇〇九年五月のカザフ現地の新聞には、これらの写真を使つた「サムライの一家」の記事が大きく掲載されている。



父・三郎さんが召集された当時は戦争も敗色濃厚となり、残された家族は、日本人だけが住むとかえつて危険だということで、ロシア人も中国人も混在している地区に転居したが、一九四五年八月にはソ連軍に占領される。

母は、父が召集されてからは病院の雑用の仕事をしていたが、戦後降伏した日本軍の部隊を捜して父の消息を尋ね歩いたり、シベリアに送られる捕虜を見て回つたりしていた。偶然母の友人がハルビンで捕虜になつていた父と会い、「今は子供たちに何もしてあげることができない。残念」という言葉が伝えられたのが、たつた一つの父に関する情報であった。母はその後看護婦の資格を取つて鉄道病院に勤務し、六歳以下四人の子供たちを育てながら、ロシア領事館に父の消息を尋ね、相談にも行つていたことを万里子さんは子供心に記憶しているという。

長姉である万里子さんの話を聞きながら、彼女を中心にして物語を続けよう。

「敗戦によつて、私が入つた日本人学校は閉鎖されましたが、母がロシア人だったので、今度は満洲里のロシア人学校に入り直しました。このときに私はニーナというロシア名を使い始めたのです。日本人であることを隠すためです。家庭ではマリコと呼ばれたりニーナになつたりしていました。一九五四年、私が七年生のときに、ソ連政府はカザフスタンの開拓政策の一環として、それまで移動を禁じていた満洲地域のロシア人も、カザフに移住できることにしました。母は十年近く経つても父の行方が知れず、私たちが日本人の子ということは知られており、迫害され差別に遭つていたことから、移ることを決意したのです」。

カザフスタンでは、北部のコクチエタウスクという田舎の地区が指定された。そこには母が働くような病院もなく、荒れ地の開墾、建築現場での荷物運搬などに就いて四人の子供を養育し

たわけである。

万里子さんはまだ十五歳だったので八年生に転入し、卒業後高校にあたる二年間を学んで、それから工場勤めをし、会計係になつている。カザフでは同じ敗戦国民であるドイツ人も、万里子さんたち日本人も肩身の狭い立場で、公には身分を明らかにできなかつた時代であつた。

万里子さんは一九五九年、二十歳で鉄道員のウイグル人と結婚、一女一男をもうける。特務機関のKGBは父が日本人であることを把握していたから、中国語が堪能だつた夫が通訳になりたいと希望したときには、妻の万里子さんの父親のことを理由に認められなかつたし、長男が兵役期間短縮の恩典を得るためにアフガン行きを志願したときにも、同様の理由で許可されなかつたという。

一九七一年に万里子さんの夫が病に伏し、彼女が鉄道の乗務員になつて生計を支えたが、七九年に夫は死去する。その後八一年に職場の上司だったアルメニア人のガルスチャン・ワローラヤと再婚。鉄道の車掌の退職後は年金生活に入つた。しかし夫との婚姻登録が出来たのは、日本への永住帰国が決まる直前の一九九九年二月になつてからである。

母は、父が召集されて行く際に「日本では女性は夫が死ぬまで絶対に再婚しない。帰つてくるまで待つように」と言い残したことと、再婚ということは考えずに父を待つた。しかしモス

クワの国際赤十字に相談してもダメだつたし、父を捜す手だけでなく、生活に追われるうちに年を取つていつた。けれども、家族全員はどうにかして父を捜し出したいという願いを持ち続けたのである。

一九七九年、弟の雪男さんが偶然にも日本の商社員・山納政之助氏と出来うとい出来事があつた。彼は山納氏に事情を訴えて、父の捜索を依頼したのである。

山納氏は四年後の一九八三年にもカザフスタンを訪れて母や姉兄にも会つてくれた。そして彼が帰国後に日本の新聞の尋ね人欄に投書。父・三郎さんが心臓手術後の病院で、鹿児島で発行されている南日本新聞に掲載されていたその記事を読むという偶然が重なつたのであつた。

一九八五年七月に、父親たる三郎さんは山納氏の案内ではるばるカザフスタンを訪問。妻と子供四人との再会が四十一年ぶりに実現したのであつた。親と子供の執念がとうとう果たされた。筆者は、「再会」という生易しい二文字でしかこの感動を伝えることができない語彙の不足を嘆くのみである。

実は一九八三年（昭和五十八年）に、松元三郎さんの日本の夫人・和（やす）さんが、厚生省に万里子さんたちの消息調査を依頼しているが、それに対する返事は、次のように実にそつけないものであつた。

要約「三重県津市の山納氏がソ連地域を旅行中、アルマアタ在住のソ連婦人と子供から松元三郎氏を探してほしいという依頼を受けたことにより、当課あて別紙のとおり照会がありました。

その内容によると、以前あなたから調査依頼のあつた件と状況が一致しますのでお知らせします。
詳細については山納殿に御尋ねくださるよう申し添えます」

当の山納政之助氏（当時七十歳）は、これに先立つて、かねて厚生省宛の長文の手紙で、カザフの一家の経緯と現状について詳細に述べ、「私は彼らの心からほとばしる訴えを聞いて、胸が締め付けられる思いがしました。それだけに真剣な願いを聞き捨てにすることができなくなりました。中国残留孤児の親さがしの例もあり、ご協力、ご尽力をお願いします」と直訴していたのであった。

父子の再会を経て、子供らを日本に帰国させる努力を続けていた三郎さんの夫人和さんは、一九九六年（平成八年）十一月に、当時の小泉厚生大臣に便箋五枚で、三郎さんも八十歳になつたことを記し、帰国手続きの困難さも含めて訴えを出したが、これもナシのつぶて。

翌年に重ねて送付した三郎さんの、政府に対する申立書を見てみよう。

◇申立書 厚生大臣 小泉純一郎殿

平成九年三月六日

「拝啓 このたび私が再会を希望して厚生省にお願いしております下記の者は私の実子であります。ここに重ねて父として証言いたします。私は昭和十八年に満洲の飛行部隊に入隊し、敗戦によりソ連に連行され、マグダガーチ、ハイラスタンの収容所で強制労働に従事しました。幸い昭和二十一年四月に私は復員できましたが、満洲の妻子は行方不明になつてしましました。

昨年十一月に大臣宛お手紙でご説明しました通り、昭和五十八年、私が心臓手術後で療養中の

とき、新聞の尋ね人欄で、子供たちがカザフスタンにいて私を捜していることを知り、昭和六年七月に私はカザフスタンを訪ねて子供たちを確認し、念願の再会を果たしたのであります。

その後帰国の件について外務省ともご相談しましたが、何しろはるか離れた国のこと、それ以降手紙が不通になつて音信が途絶えておりましたところ、昨年来在カザフスタン日本大使館のご協力もあつて消息を知ることができました。ぜひとも日本人の子として一時帰国ができるよう日本政府のご助力をお願い申し上げます。

長女松元万里子、次女あき子、長男正男、次男雪男は、満洲で生まれた私の実子であることは間違ひございません。

以上重ねて申立ていたします。大臣におかれましては私ども戦争犠牲者の立場をご諒察され、ご高配くださるようお願いする次第でございます。敬具」



小泉大臣からの返答はなかつた。しかし待つてはいられない。

ここでも協会と佐野伸壽氏とが緊密に連携して招待の手続きと渡航旅費の工面を行い、三郎さんがカザフまで行つて探し当ててから待つこと十二年目になる一九九七年五月、事故で都合のつかなかつた次男雪男さんを除き、万里子、あき子、正男さんと、万里子さんの息子アーフメットさんが初めての一時帰国を果たす。

三郎さんの日本の係累の皆さんも大歓迎。三郎さんの妻・和さんは、カザフの子供たちが「日

本のお母さん」と呼び尊敬するほど心の広い、両手で彼らを包みこんでくださる方であった。

かくて二〇〇〇年二月になって、長女万里子さんは、夫のワロージャさん、次男のアフメット夫妻とともに日本に永住帰国できたのである。

けれども、またも障害があつた。日本の家庭裁判所は、就籍を申し立てた万里子さんの日本国籍を認めない意向。理由は「国籍法により、父母が正式な婚姻をしていると認められないから親子関係はない」ので、就籍の申請は取り下げるべきだと家裁や弁護士が言つてきたのである。

満洲占領時代の反ソ連の風潮もあるう。日本刀を送られるほどの状況の中で、拳式という派手なことは出来なくても、妻の兄、姉、親しい友人たちが集まつて結婚のお祝いはしたのである。（東京家裁・松元三郎氏の陳述書）

父母と四人の子供が揃つた往時の写真もあり、ソ連満洲里領事館発行の出生証明書には、四人の子供たちとも「父マツモトサブロウ、日本人」と記されている。何にもまして父親が一家を捜してカザフまで行って再会している事実さえも顧みられないのであつた。

三郎さんは万里子さんを認知した。これと同様の問題での裁判では、二〇〇二年十一月の最高裁判での少数意見「国籍法三条は違憲の疑い」、二〇〇五年四月の東京地裁判決「憲法十四条に違反する」、二〇〇八年六月の最高裁の違憲判決などを経て、同年暮れによくやく国籍法の改正がなされている。

三郎さんは、その国籍のことを心にかけながら二〇〇三年一月に八十六歳で亡くなられ、また

長くカザフで療養中だった実母フイーワさんも同年二月に後を追った。

日本のお母さん・和さんは二〇〇八年六月にこの世を去られた。万里子さんの夫ワロージャさんも二〇〇八年九月に病死して、遺体はカザフに運ばれ埋葬された。

二〇〇九年七月末にも正男さん、雪男さんは一時帰国して鹿児島県で父や日本の母のお墓参りをした。

次女あき子さんは二〇〇七年までに二回の一時帰国をした後、夫の国であるドイツに定着している。



万里子さんは前述の東京家裁でのいきさつもあつたため、現在も日本国籍を取っていない。今や実母やワロージャさんがカザフの地に眠るようになつた。日本への永住帰国では規則によつて一家族しか連れて来られなかつたので、依然カザフにいる娘や孫の生活が心配。今年七十二歳になる万里子さんは墓参を兼ねてたびたび現地に行かなければならないということにもなつた。今の方々がビザ手続きも不要で、渡航が容易という事情もあるう。

したがつて日本で働いている息子・隼人（旧名アフメット）さんの夫妻も、孫二人もカザフ国籍のままになっている。上の孫・羅人君は今春鹿児島の高校を卒業したのでカナダの大学に進む。カザフ——日本——カナダと、国際人への道を歩むことであろう。

万里子さんは、自身の永住帰国にあたって「母に捧げる」という詩を記している。これを紹介して本稿を終えよう。

「お母さん、憶えていますか、あの1945年の戦火の夏を。

銃声、爆撃、火の海…。

あなたは傷ついた親鳥のように、

最後の力を振り絞り、

自らの翼で、私たちを守ってくれましたね。

そして運命の変転。侮辱、悪意の視線、失望…。

でも、あなたは強かつた。小さな体で全ての現状を堂々と受止め、私たちのために日に夜をついて働きましたね。



日本に定着して2年。万里子さん夫妻（中央）と、息子の隼人さん夫妻（右）。左は孫2人。
(2002年5月)

幼い私たちが正しい道からはずれないようにと、

何も心配せず勉強一筋にと、苦労を一人で背負つたお母さん。

あれから長い年月がたちました。人生ってほんとうに複雑なものですね。
いまは遠く離れ、何もしてあげられない私。お母さん、ごめんなさい。

以前よりずっと小さくなつたお母さん。

でも私たちにとっては、いまでも大きな星です。

いつまでも、いつまでもお元気で、そのおおいなる星の光で、私たちを導いてくださいね。
お母さん、ほんとうにありがとうございます。

松元万里子

五つの物語を書き終えて、ナチスのアウシュビツツ収容所から奇跡的に生還したヴィクトル・
フランクル博士の言葉を想起する。

「どんな状況でも、人生はそれ 자체イエスと言える意味がある」

再会を喜ぶ抑留者三人の雑談会

司会・小川 岣一

——カザフスタンで抑留生活を過ごして帰国された仲間のうち、小関吉雄さんは惜しくも二〇〇七年六月に千葉県松戸市で亡くなられました。今日は阿彦さんを迎える三方が揃つたので、思い出も含めてざっくばらんに雑談をしてほしいと思います。

三浦さんはサハリンでわずか十四歳で逮捕拉致され、阿彦さんは十七歳、伊藤さんは十八歳でしたね。ところで、三浦さん、小関さんのように「逆密航した」者は約四百五十名という資料がありますが、三浦さんがお父さんたちを捜すために、敗戦一年後に、稚内からひそかに舟で樺太の故郷に向かったときには、どこかの学校の先生の奥さんらと一緒にしたね。その後はどうなったのですか。

三浦 舟は六人か七人でした。私の田舎、樺太の亞庭湾に面する大吠（おおぼえ）の村から目の前、四キロぐらいの海上で捕まってしまった。そして山に穴を掘つて造つた収容所に入れられました。一週間ほどして留多加（るうたか）の刑務所に連行され、一ヶ月ぐらいで裁判になり、男も女も皆三年の刑をもらつたが、私は子供だったからでしょう、一年半の刑をもらつた。その奥さんは私と一緒にシベリアのマリンスキーの刑務所で働かされました。私は農作業や、足で踏んで糸を巻く機械の作業。女人人は手袋とか靴下を作られました。

——その一年半が無期限になるのがソ連のやり方でしたね。ところで、刑を受けたという意味はわかるけれども、皆さん「もらつた、もらつた」と言うのですね。

阿彦 おかしいんだけど、ほかの言葉がないんだね。誰もが「何年もらつた」と言いますね(笑)。

伊藤 もらつたと言うと、日本では、頂きました、有難うございましたという感じだけどね(笑)。

——裁判をやつても、言葉は通じないでしよう。

三浦 通訳はいましたが役に立たない。ロシアの男ですが、言葉がよくわからなかつた。

伊藤 おれのときも、満足に言葉は使えないが通訳はいました。

阿彦 逮捕されたときはよく話す通訳だったが、裁判のときは全く話が通じない男でしたね。

答えができないから結局何を言つてもダメだということになるのです。

——通訳がいない今まで裁判をされたり、裁判がないまま刑を受けたりという例も聞きます。

それでも、何年もらつたかはわかるの。

伊藤 サンネンとかジュウネンとか言うから。指を折つて示すこともある。

——それに対して、けしからんとか言わないので。

三浦 なんで私に刑をくれるか。私はまだ十四歳で、十六歳になつていらないからロシアの法律では適用できぬはずだと言つても、あのときはスター・リンの時代だから。

伊藤 何にもできないさ。子供でも何でも引っ張つて労働させればいいと言われていた時代です。

三浦 刑が決まつたのだから黙つていろという態度だった。

阿彦 文句を言えればもっと刑が上がつて行くぞと言われた。何しろあの頃はこわくてビクビクしていたんだもの。

— サハリンで、刑を受けても言葉がわからないからニヤニヤしていたら、この刑では足りないのかと言われたという例があります。

三浦 文句を言うと三年が四年になるさ。私は刑法八四条だった。

阿彦 私は五八条、反ソ連のスパイということで反逆罪。

伊藤 私は五九条Bだ。五八条なら十年以上の刑になるんだね。

— 皆さんは、刑を終えたときにはお金をもらったの?。シベリアでは、にしんとパンとお金をもらつて指定地に向かつたと聞いたが。

阿彦 さあ、出るときにお金なんてもらつたかね。

三浦 私はシベリアのマリンスキイの刑務所を出たときに、乾いたパンとオームリという魚、それに角砂糖をもらつた。

伊藤 何日分だったの。

三浦 十二日分。カザフスタンまでの分ということだ。あと渡されたのは「どこへ行け」と書いてある紙だ。お金は全然なかつたよ。

伊藤 そうそう。「刑務所は終わつたから、今度はどこそこへ行け」と書いた紙ね。だから最初にもらつた刑期というのは関係ない。まったく、無期懲役と同じことさ。

三浦 汽車はタダで済むから金はくれない。

伊藤 おれは証明書と六十ルーブルもらつたよ。あとは黒パン十一キロ、魚の頭としつぼ十一個。砂糖はないよ。

——十一個というのは？

伊藤

一日に一つということだもの、十一日分さ。魚の頭もしつぼも合わせて一つだよ。（笑）

阿彦 おれは何ももらわない。八〇条の刑というのはそういうことなんだ。グループでブリガード（責任者）に連れられてサハリンを出たときにはロシア人も入れて百人ぐらいいて、日本人捕虜も三十人ぐらいいたが、途中で降ろされてバラバラになって、最後にカラガンダに行かされたのはおれ一人なんだよ。

——カラガンダでも刑務所だつたんでしょう。

阿彦 そう。一九五三年にスターインが死んで、その一年後に形だけは解放された。だから全部で六年。ほんとうはもう四年なんだけどね。

伊藤 スターインよ、ありがとう。だけど帰国はさせないんだからね。喜べないさ。

阿彦 ハバロフスクからペトロパブルフスク、そこから五日間かかつてジスガスガンへ。

伊藤 いや、とても五日間じや行けないつてば。特急にでも乗つたのかい（笑）

阿彦 まあ、どこへ連れて行かれたかもわからない。だいぶあとで、ここはどこなのかといふことがわかるわけだ。

三浦 ほんとうは何日かかったのかなんて、わからないよ。時計もないし、言葉もわからないもの。そして働いているうちに、ここはどこなのかがだんだんわかるのさ。

伊藤　おれは結局二週間と三時間かかった（笑）。雪の中をあちこち泊めてもらつてね。官憲どちがつて一般のロシアの百姓は親切でした。

— 今もシベリアのカンスクに暮らす佐藤弘さんは、徒歩で五十日かかつて指定地に着いたといふ。馬小屋に泊まつたり、畠の手伝いをしながらね。貧しい農家の人たちに助けられたと言つています。

ところで、皆さんは言葉をどういうふうにして覚えたのですか。

伊藤　働きながら覚えるしかない。学校へ行くわけでもないし、働きながらひと言ずつだつたね。

阿彦　たまたま日本人の捕虜がいるとわかつても、お互いちよつと見てニヤツとしているだけね。しゃべつたらまた刑をもらうことになる。

三浦　監視がいるからね。仕事をしていても話をするのはダメ。ジャパンとかドイツとか言つても刑だよ。誰かが聞いているんだからね。そういう中でロシア語は一日ひと言覚えるという形だ。

— 何年ぐらいかかるものなの。一年では…。

伊藤　一年ぐらいでは覚えられないよ。仕事で使う言葉しか覚えられない。それに字が読めないからね。そして少しづかってきても、男性語とか女性語というのがあるから難しいんだよ。

三浦　私は四年ぐらいで話すことだけはできた。

伊藤　あんたは若かったからね。おれは十年ぐらいかな。子供が大きくなつて、学校に入つて

勉強しているのを見ながらだね。声を出して読んでいるのを五分でも十分でも聞いている。

三浦 そう、それはあるね。でもそれだって、一日仕事して、帰ってきてから家畜の世話をしないと食べていかれないから、忙しくて大変なんだ。給料も低いし。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——口クに言葉もできないのに、なんで奥さんをもらえたのかな。

伊藤 奥さんをもらうのは、ずっと後のことだよ。食うことが大事だから、そのためには：（笑）。

三浦 私は良い人に助けられたこともあって、六四年にはロシア語を話せたし書けた。彼女は学校の食堂で子供たちの料理を作っていたコックです。自分の家と学校の間は五十メートルぐらいだったから、食べたくて、よく行つていたんですよ。（笑）。

（脇で三浦夫人のニーナさんが笑顔で聞いている）

伊藤 おれはコトロガンという二三十軒の村で豚小屋のコックをしていて、日本の男はよく働くものだから、一九五二年十一月に、ドイツ娘に好かれて一緒になった。

しかしおれが犯罪者ということで、とうとう戸籍上の正式な結婚は許可されなかつたんです。当時、新しく蒸気機関車に似たような窯を持つてきて石炭で炊かなければならぬことになつたのだが、誰も焼けない。おれは機関士だ、簡単にできる。大根、かぶ、芋など野菜を煮て飼料を混ぜるわけだ。そこで貧しい生活をしていたが、後に息子を学校にやるためにウズナガチ村に引っ越したわけです。ウズナガチでは大工の仕事をやりました。

阿彦 おれはコンクリート工場で溶接工として働いていて一九五六になつて結婚した。一人

では食えないが二人なら食えるんだね。妻のエカテリーナはセメント作りの作業だった。二人の子供が出来たのに、彼女はクレーンから、縛つてあつた鉄材が落下して、下敷きで亡くなつたのです。

——皆さんの子供さんは？。

伊藤　皆ドイツにて、子供三人、孫六人。ひ孫は現在四人だけれども、二〇一〇年春に二人増える。六月頃にはもう一人出産だよ。子供や孫が二年ごとに日本に遊びに来てくれるのを楽しみにして生きています。

阿彦　おれは子供は一人で、生まれたときに日本名にして息子はテルオ、娘はイリナ。孫は三人で全部男だが、これは息子の妻の連れ子も入れての数だから、本当の孫は一人。ひ孫はまだです。息子はカザフを代表する重量挙げの選手になつたが、今は離婚して炭鉱の機械修理の技師になつていて。今まで日本に連れて來た子供は娘のイリナだけです。

三浦　私は子供は二人で、ロシアと札幌にいる。それぞれに孫が一人ずついます。娘はクラスノヤ尔斯クのアバカンに住んでいるが、そこは亡くなつた日本人がたくさん埋葬されている所です。

——娘さんはカザフからロシアに移ってきたのですね。

三浦　そう。私が日本に来る二年前に移ってきたのです。私たち夫婦は二〇〇九年夏に初めて会いに行つて、九年ぶりの対面さ。よかつた、よかつた（笑）。

——息子さんは札幌ですね。

三浦 そう。この近くにいて、車の修理の会社で働いている。

伊藤 よく働く立派な息子さんと評判だ。相当稼いでいるようだよ。

——すると阿彦さんが、子供が一番少ないんだ。

伊藤 カラガンドはうんと寒い地方だから遅れていたんだ。（笑）

——話は戻るけれども、皆さんや親御さんは樺太で何をやっていたの。

伊藤 父は野田の王子製紙にいたが、何をやっていたのかな。おれは十五歳で機関区の窯炊き、機関助手だ。豊原で試験を受けて数え十八歳で機関士になった。普通は二十歳でなるのだから一番早かったのです。だから兵隊には行かなかつた。

阿彦 うちは本斗の漁業です。おれはソ連になつてから造船所で働いたんだが、戦時中は青年団について義勇隊に組織されていたので、日本の兵隊の身分を隠していたという作り話で密告されて、捕まつた。当時はサパー・チカ（犬）の犠牲になつた人は多いのですよ。

三浦 私の父親は大吠の魚獲りや炭焼きでした。家庭の事情があり、私は父の友人の世話になつていたが、ソ連軍の進攻から逃れて、父と離れて稚内に行つて漁師の手伝いをした。父や姉が引き揚げてこないので、心配になつて探しに行つたわけです。

伊藤 機関士になつたばかりで敗戦だつた。ロスケの爆撃でトンネルに逃げ込んだりしたもので。機関区の近くの、機関車が向きを変える所があるでしょう。そこを狙つて来るのです。

三浦 私の一番上の兄・虎雄は沖縄戦で亡くなりました。戦後、二番目の義雄は札幌で、三番目の雪雄は北海道の滝川で亡くなっています。日本に来て姪一人と会えたが、上の姪は三年前に

東京のホテルで寝ていて亡くなつたのです。今でも、残つてゐる姪とは時々会いますよ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——皆さんが知り合つたのは、どういう経緯ですか。

伊藤 戦後二十何年も経つた頃でしたね。ウズナガチに日本人がいると聞いて、三浦さんが訪ねてくれたのが最初じゃなかつたかな。三浦さんは、その頃トラックの運転手だつたね。

三浦 トラックでカルガレイから十二キロの近さだつた。一九六八年頃だね。

伊藤 その一年後におれも三浦さんの所に行つたことがある。それからあつという間に彼は引つ越してわからなくなつてしまつた。

三浦 アルマトイから三百キロ離れたウシジヤルマへ引っ越したのです。

伊藤 電話も何もない時代だし行方がわからないんです。その後が大使館の佐野伸壽さんで、一九九三年か四年に、カラガンダに日本人が一人いるということで阿彦さんの所を訪ねたんじやなかつたかな。そして佐野さんが、おれに阿彦さんがいるということを教えてくれた。佐野さんがアルマトイに来た日本の映画会社の人によられて、おれと阿彦さんとに会つたんだよね。三菱商事の杉山さんもその頃ウズナガチ村に来てくれた。

阿彦 野村利男さんというカザフの炭鉱で働いて足を怪我した人が、お墓参りに來たときに訪ねてくれたのが最初の日本人でした。おれが生きていることを弟に知らせてくればと頼んだ。この方はもう亡くなりました。このたび日本に一時帰国して、東京の歓迎会で佐野さんとも杉山さんとも会えたんです。日本人が訪ねてくれたときは嬉しかつたし、現地では伊藤さんという仲間が

できて、日本人の墓地搜しなどもやりました。

伊藤 一人ぼっちのときとは気持ちが違つたね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

阿彦 しかし、その前に一人いたね。元は樺太の炭鉱にいた人だ。三浦さんと一緒に行つたでしょう。

三浦 鎌田さんかな。

阿彦 そうそう、ジャンブールの鎌田徳雄さん。元は樺太の炭鉱にいた人だ。長い車を初めて製作して雑誌に載つたので有名になつた。小関さんとは前に知り合いだつたんじやないか。

— 小関さんがカザフに居ることはどうしてわかつたの。

阿彦 日本に行つたということを聞いたんじやなかつたかな。

伊藤 おれは阿彦さんと一緒に訪ねたことがあるよね。

阿彦 そうだ。九二年にジャンブールの鎌田さんの墓参りに行つたときに、そこで小関さんの娘さんと会つて、それでわかつたんだ。

三浦 私はタルガールの小関さんの家を訪ねたが、山の方のコルホーズで羊飼いして働いているというので会えなかつた。娘のガーリヤさんは会つて話したんです。一時帰国で日本に来たときに、初めて小関吉雄さん本人と会つたわけで、カザフスタンでは見たことはない。小関さんと会つたときの写真は今も持つています。

阿彦 おれが行つたときは、ちょうど家を建ててているところだつた。娘のガーリヤさんとカザ

フ人の夫、その子供、すなわち小関さんの孫だが、女二人、男一人いたね。

——伊藤さんと阿彦さんは、カザフにいた日本女性を訪ねていましたね。

阿彦 松元さんだつたかな。

伊藤 松元さんじやない。松元さん四人姉弟には、ソ連抑留から日本に復員した父親が、カザフスタンまで探しにきて奇跡的に会えたという物語がある。長女の万里子さんは鹿児島に永住帰国できたが、長男、次男は今もカザフにおり、次女はドイツにいますよ。

阿彦 松元さんには、おれが一時帰国したときに日本の協会から松元姉弟の帰国用の書類を頼まれて、持つて行つて会つた。

三浦 松元さんの息子さんはカザフの警察にいた人だが、今は日本から車を輸出しているね。私はアルマトイの空港で会つたよ。

——アフメットさんです。今は松元隼人という名前で、商売のほかに鹿児島県警の通訳もやつている。

阿彦 名前は忘れたけれども、カラガンダに日本人の姉妹がいて、たしか床屋だったが、一回目は休みで不在だつた。薬が欲しいと聞いて二回目は持つて行つたんだ。

伊藤 栄養剤じやなかつたかな。二回目も、扉を開けてくれなくて会えなかつたんだよね。男性ではもう一人、吉田弘一という日本人が、ウズナガチに近い所にいたね。

——それは石川県の人です。その娘さんがカザフにいて、父の親族を捜してほしいという手紙が来たので、調べて吉田さんの兄弟の居所も知らせたけれども、それつきり音信不通になつてしま

まつた。

三浦 実を言うと、吉田さんがまだ独身のときに、私と一緒に住んだことがある。どこにも行く所がなくて私の畠の手伝いをしていました。彼の話ではモスクワ大学の近くで働いていたということだったが。

伊藤 たしか朝鮮で憲兵だったので、十年の刑だったと思う。

三浦 その後、ソーラという女性と結婚したんです。

伊藤 男の子と女の子が出来たんだよね。アルマトイから二、三十キロ離れたアクチャーブリだが、しばらく行ってなかつたので訪ねたら、彼が死ぬ二、三日前だった。話も何もできない。そこで見た姿はひどかつたんです。骨と皮だけになつていて実に哀れだった。蠅がいっぱい群がつていてさ。

三浦 アクチャーブリのソホーズにいたんだよね。息子や娘も大きくなつていたんだけれども、寄らないんだ。ほんとうにかわいそつた。亡くなつたのは一九七〇年頃だつたね。頭の良い人だつたのに。

伊藤 そう。人工受精のスペシャリストで有名だつた。しかし病気になつたら誰も寄らない。

—— 松元さんのほかにも、満洲北部のハルビン近辺で逮捕された家族で、カザフスタンに送られた人は多かつたようです。佐賀県本籍の姉川さん、千葉県本籍の関口さん姉弟、長崎県本籍の山本さん母娘もいたはずですが、今は行方もわからない。

伊藤 今も健在なのは、アスターにいる奥脇和子さん母娘だけかな。協会の招待で日本に二度

帰国しているね。

——ほかに、アルマトイに森博子さんがいます。東京の国際問題研究所にいた故・都沢行雄さんの妻タマラさんの妹で、今ロシアのノヴォモスクスクに住んでいる森ルミ子さんの姉でもある。樺太敷香（しそか）の保恵（ほえ）で母親とともに逮捕された女性です。一度だけ一時帰国したけれども、先日電話したところ、もう足腰が悪くて日本には行けないと黙っていました。あと、横浜の村谷忠誠さんの姪ナタリヤさんがアルマトイにいるはずです。

阿彦 日本人は必ず死んだんだろうけど、我々は切り離されているからわからない。

——日本政府だって、連れ去られた数や死者について正確な統計があるわけではない。皆さんのような民間人でなくても、カザフに連行された軍人の死者は一千四百五十七名といわれていますが……。

阿彦 書物では、シベリアの苛酷さを飢餓、酷寒、重労働の三重苦と書かれているが、足りないね。もう一つ、いつ帰国できるかわからない「絶望的不安」だ。そしてある年、軍人だけが復員する場面に遭遇した。おれは日本人だと叫んでも拒否されたんだ。おれは泣いた、泣いた。

三浦 日本に帰つて世界地図を見ると、日本がど真ん中にあつて大国とか言つているけれども、よそで見る地図は、向かって右の上の方の小さな島ですね。自分が何でこんな何万キロも離れた所に一人でいなければならぬのかと不思議な気もしました。あんな遠い国にはもう帰れないんだなど、絶望の感じですね。

伊藤 そうだ。日本に帰れずにいつ死ぬかと思う時代が続いたね。おれは初めは、煉瓦で造つ

たストーブの脇に藁を敷いて寝る生活。ここで死ぬのは大変だと言われて、カザフの年寄が子牛を四、五十頭飼つている所へ行つて、餌をやつたり水を飲ませたりした。

— 牧場ですね。

伊藤 一月からやつて四月には移動しなければならない仕事です。そこを逃げ出すまで二年となんばか居た。逃げてから今度は豚小屋で働くのです。

— 牛から豚ですか。

伊藤 豚小屋で餌を食べさせて五、六年。それから家族を養うために大工仕事に入る。年金をもらう六十歳まで大工・建築の仕事をしました。皆もそうでしょうが、結婚するときは、これで日本とはおさらばという気持かな。

— 奥さんはドイツ人でしたね。ドイツ人の捕虜も多かつたが、敗戦国側の人同士ということもあつたのでしょうか。

伊藤 妻がドイツ人というのはおればかりではないんです。小関さんの奥さんはカザフ人だが、あとは皆ドイツの女性だった。頭は良いし、奇麗好きだし、何でもやってくれる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

— 最後に、日本政府への要望をお話ください。

阿彦 政府といつたって、小川さん、佐野さんしか知らない。感謝しています。

伊藤 日本政府はカザフに放置されていたおれたちを全く捜してくれなかつた。皆死んだこと

にされていたわけです。それを今言つてもしようがないが。

三浦 私は、小川さんや政府の皆さんに対し「スパシーバ・ボリショイ」です（笑）。永住して、ここまで面倒見てもらつて、今は幸せな暮らしだす。

阿彦 詳しいことは知らないけれども、カザフではこういう三浦さんのような暮らしができないね。でも一時帰国できて、弟にも会えて、協会の方々がいろいろと手伝つてくれて、ありがとうを言うだけです。

— 生活費も不足するでしょ。

三浦 日本に帰つた人たちは、皆生活は同じですから。中国からの帰国者ががんばりもあつて、年金ももらえるようになりました。私は大丈夫ですが、今後年金は無くなるという話を聞きました。

— そんなことはない。誰が言つているの。

三浦 伊藤さんから聞いたけれども。

— 伊藤さんは黙つてドイツの息子や娘の所に行つたり、時々所在不明になるから、あいつには払わない方がいいんじゃないかということでしょう。石巻市だけ年金が無くなるかも知れないよ（笑）。

伊藤 それは困る。政府に言つてくれ（笑）。しかし病院では助かつていますよ。

三浦 病院で妻は毎月薬をもらえる。私も血圧のために二ヶ月に一回病院に行つています。札幌はバスも無料券がもらえてハラショードです。料理はすべて妻の手作り。私は毎朝六時に起き

て運動をしているし、時々は車で釣りに行っています。平均年齢はロシアでは六十、カザフは六十三歳といわれるが、日本にいれば長生きするでしょう（笑）。あとサハリンに行って、大吠の田舎で母の死んだ所を捜してみたい。

阿彦 日本の弟も体が良くなつたし、この春はにしん漁でもたくさん獲れてお金も入つたみたいで、安心しました。

——伊藤さんは、帰国して間もなく、ロシア語の先生をやつたね。

伊藤 先生なんて…。石巻の港にロシア船が着くでしょう。船員が泥棒をやるから税関が船の中を検査する。その通訳ですよ。車が盗まれたのを見つけたこともあった。それで税関がいつとき教室を開いて、ロシア語を教えることになつたんです。

阿彦 おれも、日本に来て先生をやるかな（笑）。

三浦 カザフの生活は相変わらずなんですか。年金は女で子供の多い人は五十歳だったのが五十七歳になつて、男は六十歳なんでしょう。

阿彦 昔は女は五十歳だったのが今は五十三歳です。男は六十歳だが、炭鉱なんかで働いていれば早くもらえる。おれは五十五歳でもらつた。警察や軍隊は年齢に関係なく二十五年勤務すれば年金ですよ。イリナの息子は軍隊です。

三浦 私は六十歳で年金でした。

伊藤 十八で軍隊に入った人は四十三歳で年金だね（笑）。ロシアでは年金は七十になると上がり、八十歳になるとまた上がるね。

阿彦 カザフでは、現在はお金をもらうことが大変なんです。一ヶ月、二ヶ月支払われないのは普通だ。だから娘のイリナの夫はもう仕事はしていない。

——何の会社だったの。

阿彦 肉の会社でした。問題は大きな会社はみんな外国人が買ってしまうことなんです。だから文句も言えない状態になつていて。イリナは電気屋の売り子の仕事で月一万五千テング、百ドルです。

三浦 去年の給料をまだもらっていない人もいるようですね。あとで…と言われているそうだ。
伊藤 おれは年金六ヶ月分もらわないで来たんだよ。無いと言われたら文句なんて言うことはできない。くれないと言われたら、どうすることもできないさ。

——阿彦さんの年金はいくらですか。

阿彦 三万三千テング。（註・一ドルは百五十テング）

三浦 二百ドルぐらいだね。

阿彦 十年の刑ということも影響しているんだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——阿彦さんも、もう日本に来たらどうですか。今の奥さんの子供たちに遠慮してばかりいいでさ。

阿彦 だつて子供一人しか連れて来られないのは困る。また離散家族をつくるから。これをなんとかしてほしいんですよ。ドイツ政府は、ドイツ民族は皆来なさいと言つてくれたが、日本民

族にも全員帰りなさいと言つてほしい。

——だから、日本政府に言うことはないかと聞いたんだよ。（笑）

三浦 娘のイリナさん夫婦と帰国して、あとで息子の輝男さんを呼び寄せるしかないんだね。うちは息子が自立して、嫁も働いている。だから誰かを呼ぶこともできる。私自身が呼ぶことはできないけれどもね。

阿彦 娘が働けないとどうするのさ。札幌のセンターで四年も五年も勉強しても日本語ができないということを聞いた。そして働けないとなれば、呼び寄せだってできないでしょう。またまた一家が離散の状態になる。そこが一番の問題ですよ。

伊藤 それは交流協会に手伝つてもらわないとダメだ（笑）。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

三浦 波乱の人生だったが、こうして仲間と語り合えるのも、生きていればのことだ。ロシアの九〇年代の通貨の切り下りで、カザフでは明日の十一時までに町の銀行で切り替えると言われて間に合わず、車を買う用意のお金も全部失つたりしたが、今は遠い思い出だね。

伊藤 あのときは百ルーブルが一ルーブルになつた。町へ行くのにバスも通つていなかつたから、おれも交換するひまがなかつた。ずっと、ひどい時代だったよ。

阿彦 おれは夜になると泣いていたな。日本のことを考えていたら涙が止まらなかつたもの。こうして弟の家を訪ね、伊藤さん、三浦さんと会い、佐野さんの家にも泊めてもらつて、やはり幸せと思うべきなんだろうかね。

——戦後六十五年。戦争の犠牲者の方が忘れ去られようとしています。皆さんの存在と、逞しく生き抜いた経験が若い人にも勇気を与え、語り継がれるように、私たちも努力したいと思っています。有難うございました。

(一〇〇九・一一・〇八)

あとがき

鳩山首相が退陣し、菅直人新首相が誕生する前日、六月三日には私は福島県K町にいた。敗戦後、満洲からソ連によつて連行され、シベリアで亡くなつた同町出身の男性が、満洲で生まれた三人の実子の本籍を同地に作つておいてくれたことから、今は六十歳代になつてゐるロシア在住の三人姉弟が、その本籍地を訪ねたいと希望していることが伝えられたのである。事前調査のために現地を散々歩き回つてみたが、時代は変わり、目的地は山林と化しているようである。当然のことながら町役場に行く。応対に出た者も、担当と称する職員も、そこの町長印のある戸籍簿を示しての私の説明に何の関心も示さない。三〇分ほど面倒くさそうに地図類を調べた後、図郭集成図なる紙を示して「その地番はない」と言うだけ。せめてその白地の図だけでももらおうと思うと「はい、三百円」と、これだけははつきりと発言。

過去の経験では、市町村を訪問して、この町にシベリアに抑留された人がいたとか、その係累がまだ残つているなどと話すと、役場ではわが町の問題だと体を乗り出して話を聞き、調査に協力したものだったが…。

その二週間後の六月十六日夜、国会閉会の直前に「シベリア特措法」が成立。死んだ人、置き去りにされたままの人たちは無視された。

本稿は、この法案成立への推移を見てから、戦後六十五年目の八月十五日前に出版しようとし

たものの、到底間に合わないことになつた。もつとも、いまや「敗戦の日」にも関心がなくなつてきたといえよう。その現実も正面から受け止めなければならないであろう。

こういう時に、国会関係の文書を作成しているプロセス社が手助けしてくれることになり、小冊子にまとめ上げた次第である。校正・修文は専門家の笛原茂氏にお願いした。

急いで編集されたプロセス社の梅田いずみさんに心からお礼を申し上げます。今後さらに物語をまとめるために関係者のご協力をお願いすること切なるものがあります。

(一一〇一〇年六月二十五日)

解 説 罪なき同胞の軌跡

齊藤精一

本稿に登場する皆さんを私は存じ上げている。日本に一時帰国したときの歓迎会でお会いし、その喜びと苦惱を直接伺っているからである。そのとき私は往時の樺太時代の誰彼の面影をもしきりに思い出す。

私は昭和二十年に陸軍士官学校を卒業し、樺太の工兵連隊に配属された。七月に入るとソ連側の日本侵攻訓練の状況が見取られ、師団は危機感を持つて対応策を上申し、作戦の大転換が図られた。即ち対米警戒から対ソへである。八月九日、ソ連軍は北緯五〇度線を突破してきたが、対ソ方針への転換により国境守備隊、警察隊は余裕を持って応戦し、終戦まで敵を古屯・八方山地区の線に止どめていた。私は二十歳で小隊長として爆破作業隊を率い、ソ連軍の南下を食い止めため次々と鉄道橋、道路橋を爆破する役割を命じられた。当時の兵隊は樺太と北海道出身者が主体であったので「郷土部隊」であり、樺太の家族を守る、北海道には攻め込ませないとの意識が強固で、全力を尽くしてソ連軍に抵抗した。ようやく八月二十二日に日ソ両軍間の停戦協定が結ばれたが、この日に樺太の首都・豊原が爆撃を受けており、西海岸の街々は砲弾にさらされてゐた。終戦の詔勅が出た後の一週間で軍民の死傷者が数千人といわれることは実に残念の極みである。

軍隊は収容所に、民間人は苛烈な軍政管理の下に入り、これが長期の厳しい抑留につながった。我々が問いただしても、ソ連軍幹部は「スコーコー ダモイ」（暫くすれば帰国出来る）と氣休め程度の返事。騙されたと知つても後の祭り。年末には収容所向けの「日本新聞」が配布され「今日本国内は飢餓により一日何万人もが死んでいる。直ちに帰国するよりも暫く当地で食事をとり、日本の状況が改善してから帰国する方がよいのではないか」と書いてあつたが、我々の「一刻も早く帰国し家族に会いたい。苦しくても歯を食い縛つて頑張っているんだ」という叫びには程遠いものであった。

我々はソ連軍の要求によって、爆破した橋梁の修復作業を終えたが、その後いつとき上級幹部と将校だけが隔離収容された際には、これでシベリア行きは決定的との悲観論も出た。年を越した昭和二十一年に入ると抑留長期化の不安がますます現実のものとなる。帰国の目途さえあれば我慢出来ようが、全く見通しなく不安の日々を送る苦しさはどうにも表現のできないものであった。収容所内では「コッククリさん」と称するおまじないが大流行し、苦しい気分を紛らわせていた。

幸い私は一年半で樺太から復員できたのだが、その期間でさえも耐え難いものであった。本書に登場する方々はその何十倍もの長期間、孤独の中でどんな苦しい思いをしたか、想像を絶する。

私は、日本サハリン同胞交流協会に加わり、大陸の担当者として三回にわたりクラスノヤルスク、カансスク、ハバロフスク等十カ所以上を訪ね、帰国が叶わぬ現地に留まる同胞のお話を伺う機会を得て、涙を禁じ得なかつた。何回もロシア大陸の地図の各所に赤印をつけ、ここには何某という方が居ます、この人は弱つて動けなくなっていますと外務省、厚生労働省に説明し、すみ

やかな対応を求めたが、打てば響くような答えはなく、年月が過ぎた。私の脳裏にはここ数年で亡くなられた多くの同胞の名が刻まれている。

今回「シベリア特措法」が遅きに失したとはいえ成立したことは、私自身元軍人として了とするも、国内に生存している軍人を主体とする考え方には納得できない。強制労働を経ても、軍人以上に拘束され、帰国を許されず、シベリア、カザフ等で命を絶った民間人、その家族、また、なお生き続けている民間人同胞に対しての補償を切に希望するものである。

私も今年八十六歳。話をして、「サハリンってどこ?」と聞かれるほど風化してきている世情を何としよう。本稿は極限の境遇の中で生き抜いた同胞の軌跡であり、おそらく日本の歴史に行も書き残されることはない棄民の姿を如実に伝えるものとして、若い人たちにも一読を薦めたい。

(元樺太工兵第八十八連隊・少尉)

平成二十二年六月三十日



小川 峠一 (おがわ よういち)

NPO法人日本サハリン同胞交流協会会長
近著に「樺太・シベリアに生きる
～戦後60年の証言」(社会評論社)

¥600

2010年7月20日発行

置き去りにめげず
カザフスタンで生き抜いた
同胞たち

NPO法人 日本サハリン同胞交流協会

印刷・製本 株式会社 プロセス